
MixJuice

朝比奈 龍希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mix Juice

【Nコード】

N5564S

【作者名】

朝比奈 龍希

【あらすじ】

天の邪鬼な光月海（元シアーナ姫）と、鬼畜サドな火鷹忍（元ラリス王子）の転生モノのボーイズラブです。悲恋だった前世を変え
るべく出会った二人のお話。

キャラクター設定（前書き）

約束の丘シリーズキャラクター設定です。

キャラクター設定

光月 海 KOUZUKI KAI

誕生日 12月25日

火鷹忍の恋人。前世の記憶の封印のせいで、満月の光を浴びると女性に変化すると言う特技(?)を持つ。

不良グループ【蒼龍会】の裏番という地位も持っている。

人間と精霊の間に生まれたハーフ。父は世界的にも有名な画家で、いつも世界中を飛び回っている。その為、中等部2年から叔父の家に、翔達を出会うまで一緒に住んでいた。

叔父の家は、茶道(光月流)の家元で、叔母の実家が日舞の家元である。

海の前世はシアーナ・リユース・ティア姫。

所持する剣は、【水の剣】と【氷竜剣】

シアーナ・リユース・ティア

海の前世。アトランティスのリユース国のお姫様。

白竜の名と力を受け継いだ為、黒竜王に狙われる。

黒竜王の城にて、ラスと弟助^{パール}ける為にその身を犠牲にした。

ラスとは婚約者で恋人だった。

火鷹 忍 HIDAKA SHINOBU

誕生日 5月5日

光月海の恋人。火鷹一族直系の次男。陰陽師の家系に生まれ、火を操る事が出来、陰陽師としての腕も一流。

白鳳学園高等部の生徒会長を務めている。

忍の前世はラリス・リユース・ティアナ王子。

ラリス・リユース・ティアナ

忍の前世。アトランティスのティアナ国の王子様。

ティアナ国の王位継承者で、炎竜王の名と力を受け継いだ。

黒竜王との闘いで、命を落とす。

シアーナとは婚約者で恋人だった。

皇 翔 <スメラギ ショウ>

7月7日生れ

髪の色と瞳の色は、鳶色。

皇一族直系の嫡子。光を自由に使う事が出来る力を持つが、本来の力は光の剣によって封じられている。《光の剣》の所有者。性格は明るく能天気。雷を実の兄弟様に思っている

風水 雷 <カザミ レイ>

7月7日生れ

髪の色は茶銀系の色。瞳の色はアクアマリン系。

風水一族直系の唯一の生き残り。遠縁の皇家へ5歳の時に引き取られる。風を自由に操る事が出来る。《風の剣》の所有者。

性格は物静かで誰にでも優しいが、特に翔には甘い。(翔が好き)怒らせると一番怖い人でもある。

白の伝承

金と銀の輝きと炎と水を掲げよ

黒き安らかな闇

白き暖かな光を天にかざす時

古の都に汝らを導かん

宿星の下に導かれた申し子よ

我を解き放て

この暗く閉ざされた闇の中から

総ての過ちを正す為に……

我を復活させよ

それが汝らに課せられた宿命

我の願いを叶えよ

～～～白の伝承歌より～～～

紫暗しあんの空に浮かぶ、くつきりとした細い細い三日月と、降ってきてそ
うな星の下に広がる草原に、二人の男女が向かい合っていた。

けれど、愛を語り合う様な雰囲気ではない。二人は、ギリシヤ神話に出てきそうな服装をしている。女性の方は白い装束で、男性の方は黒い装束を身に纏っていた。

膝より少し長めの髪で、少女の様な可憐な雰囲気を持つ彼女は、両目に涙を溜めて黒髪の青年を見詰めている。

優しい面影を持つ青年は、濟まなそうな表情で彼女を腕の中に抱き寄せて言葉を紡いだ。

「すまない……ラティナ」

「嫌よっ！ どうしてあなたが、罪人の烙印ちやくいんをおされて『地界ちかい』へ行かなければならないのよッ！ 光龍王様こうりゆうおうさまも、聖龍王様せいりゆうおうさまも何も理由を教えて下さらない……あなたが、一体何をしたと言うの？ 私はあなたの妻なのよ。どうして、何も言っ下さらないの？ 答えてよ、ダーク……」

肩を震わせてラティナは、彼の衣を掴み問い掛ける。涙が零れ落ちない様に、必死に堪えて顔を上げ彼を見ている。

「理由は言えない……だが、私は何もしていない。信じて欲しい。

ラティナを裏切るような事も、光龍王様や聖龍王様に刃を向ける様な事もしていない。ただ、あの御方の為に私は、敢えて烙印をおされる事を受ける事にしたのだ」

「あの御方って誰よッ！ 私を一人にする程大切な？ 私を……愛してないの？ 私はこんなにも、ダーク……あなたを愛しているのに」

ラティナはヒステリックに叫ぶと、ボロボロと泣き崩れるかの如く、ダークの胸に顔を押し当てた。

ダークは苦しそうに眉を寄せ、ラティナをきつく抱き締める。

「私は、ラティナを誰よりも愛してる。私の気かけりは、お前を残してこの『天上界』を追放されてしまう事だ」

「なら何故、どうして庇ったりするの？ 総てを話せ良い事じゃないの！ 私を一人にする事よりも大切だと言うの、ダーク……」

嗚咽を漏らしながら、ラティナが言う。

「……出来るならば、私はお前を連れて行きたい。だがそれは、私のエゴでしかない。ラティナ……君を辛い場所へとは連れて行けない。苦しめるだけの未来だと判っているのに、君を連れて行く事など私には出来ない」

「それでも良いから、私を連れて行ってよッ！ あなたの居ない世界など、私には考えられないわ。どんなに辛くても、苦しくてもあなたの傍が良い。あなたと一緒にが良い」

顔を上げるラティナは、伝う涙を気にせず言った。

ダークはラティナの頬に触れ、ゆつくりと彼女の唇に自分の唇を重ね合わせる。

「それは出来ないよラティナ。君はこの世界になくってはならない存在なのだから。白竜の名を持ち『調和』と『増幅』を司る女神ラティナだ。私は調和を乱す事は出来ない」

「それがどうしたと言っの！！ 私はあなたと一緒にいると約束したわ。何かあるうとも、一緒だと誓ったじゃない！！！」

ラティナはイヤイヤと、首を横に振る。ダークは困った表情をして、ラティナの身体を自分から離す。

「あっ……」

「ラティナ……例えこの身が朽ち果てても、触れ合う事が出来なくても、私の魂はいつも君の傍にいる」

優しい微笑みをラティナに向ける。

ダークの身体が、ふわりと地面から離れて行く。

「あっ……あ、ダーク……！！」

ラティナは離れてゆこうとする夫の腕を取り、引き止め様とした。

「……ラティナ、愛しているよ。いつまでも、いつまでも……我を守護する静かなる『黒き闇』よ、我が『黒竜王』の名に於いて……最愛の妻にして『白竜王』を護りたまえ」

「いやあああっ！ ダーク ツー……！！」

するり、とすり抜けてゆくダークの腕。

「いつか、時の果てで出会える日が来る。何度生まれ変わっても、

何度転生を重ねても、ラティナ……君を、君一人を愛しているよ。
必ず逢える。だから、泣かないで。せめて今だけは君の笑顔が見たい」

「……ダーク」

天から銀色の光の柱が、ダークに降りてくる。
光に溶け込む様に、彼の身体が消えてゆく。

「ああっ！ いや、行かないでダークッ！！！！」

目を見開いてラティナが叫ぶ。だが、その願いは、けっして叶えられない事はない。

銀の輝きが、紫暗の闇に星屑となって散らばり溶けた。

「いやあああああああああ！！！！」

ラティナは草の上に泣き崩れた。

幾千の星が降る。

涙の様に、雪の様に。

二人を嘆くかの様に。

無数の光の軌跡を描いて。

ラティナに降り注ぐ様に

。

おはよう。

「……………れ……………？」

「れ？ じゃない！ 早く起きろ海」

ぼやけた視界と思考で、俺はその声の主を見遣った。

窓から注がれる夏の朝日の中で、こちらを見ている彼の名は、火ひ
だむしのふ鷹忍たかしのぶと言う。

高校二年生とは思えないほどの冷たい印象を持ちながらも、その類希なる美貌を損なう事無く、更にそれを強く引き立たせる。

前世で忍は俺の恋人で婚約者だった、ラリス・リユー・ティアナ王子で、俺はシアーナ・リユース・ティア姫という関係であった。けれど、シアーナはラリスの目の前で悲しい最期を遂げた。

その後、永い年月を経て……………俺、こうつきかい光月海と忍は紆余曲折しつつも、現在は結局……………元の鞘に収まって、俺と忍は『恋人同士』をしている。

「ううーん」

ベッドから上半身を起こした俺は、腕を天井に伸ばして大きく息を吐いた。視界に入ってくる忍は、半袖のホワイトシャツと、茶系のパンツを着こなしている。

忍はベッドの横に来て屈むと、俺の頬に手を当てる。

「ん？」

キョトンとしている俺の顔に、忍の顔が迫ってきた。

「ん……………っ」

ほんの少しの時間、唇が重なり合い離れていく。

いつもは冷めた瞳でいる忍だが、こういう時の表情は違った。

俺に、俺だけに。

優しく。

ふわりと、微笑む。

前世で『俺シタ』に向けられていた『ラリス』の微笑みで……………。

この表情をする時の忍は、苦手と言うよりもつい見入ってしまうのだ。あまりにも優しい瞳で微笑まれたら、誰でもクラッ……ときてしまうだろう。

ほけ〜と、している俺に忍は、小さく笑って問い掛ける。

「どうかしたか？」

「なっ、何でもない！」

俺は忍から逃げる様に、ベッドから抜け出す。着ていたパジャマを脱ぐと、ベッドの上に放り投げる。スライド式のタンス中から、カジュアル系のシャツと、ジーンズを取り出して着込む。

「……………」

背中刺さる視線が痛い。

忍が俺を見ているのが分かる。振り向いて文句を言いたかったが、振り向けなかった。

理由は簡単。あいつは、俺が振り返ったらにつきりハートマーク付きで、微笑むに違いないのだ。どうも、俺はあの微笑みにマジで無茶苦茶弱い。

通常、忍は人前で沈着冷静を完璧に徹しているので、運が良くても営業スマイルを見れる位であった。あの微笑みを見る事は出来ない。見る事が出来るのは、俺だけの特権だけとは言え……ハッキリ言っ
て俺の調子が狂う。

照れ臭いと言うか、恥ずかしい以外の何ものでもないのだ。情けないけど、惚れた弱みだよ……ホント。

ほんわかな日常

「おっはよ〜んっ!!」

ダイニングキッチン入ると元気な声が、俺と忍にかかる。
とびいる鶯色の髪と瞳を持つお元気少年は、この家主の皇翔^{すめらぎょう}。

「おはよ。二人とも」

その隣で穏やかにクスクス笑う、アクアマリン色の瞳と茶銀色の髪を持ち、翔とは正反対の少々大人びた印象を与える彼は、風水雷^{かざみらい}という名であるが、皇家の養子で翔の兄弟にあたり、もう一人の家主でもある。

「おはよう。お兄様、忍様」

ふわふわの金髪と蒼い瞳で、ちよつと幼さが残る笑顔を向けながら、朝食をテーブルに並べているのは俺の双子の妹、ティア・アリス。

俺とティアの苗字が、全然違うのは精霊と人間のハーフで、俺は『人間界』でティアは『精霊界』で別々に住んでいた為である。

母は精霊で、父は人間で……精霊の血が濃かったティアは、母が育て……人間の血が濃い俺は、父に育てられた。両親の過去に何があつたかは良く知らない。

物心ついた時には、死んだと聞かされていたから……それ故、俺達は生き別れだったが、精霊界で起きた事件によって俺達は、再会を果たす事ができた。

ちなみに、ティアは精霊界を逃げ出した訳でも、追い出された訳でもない。彼女は精霊界を統治する『精霊王』に仕える『水の巫女』という任に就いている。その為、ティアが人間界に来るには王から許しを得なければならぬ。勿論、彼女は許しを貰ってここにいるのだ。

何はともあれ、今はこの五人でこの皇家にて、楽しく住んでいる。

それと、雷以外はきちんと家族が健在する。無論、翔の両親も、である。

この家は元々、翔と雷が白鳳学園高等部に入学することが決まり、皇家が用意したのである。

結構広くて部屋数もあると言う事で、翔と雷が俺達に「一緒に住まないか？」と誘ったのだ。そんなこんなで、今に至ると言う訳である。

翔とティア、俺と忍、と言う組み合わせでテーブルに座り、雷は動き易いように一人で上座に座っている。

「ねえねえ！ 海と忍は今日ヒマ？」

ニコニコ顔でパンを千切りながら、翔が俺達に問い掛けた。

「悪いが、今日は仕事だ」

忍は手を止めて言う。

「除霊？」

「ああ、しかも五件入ってる。早目に済まして帰って来るつもりだが、遅くなるかもな」

そう言うのと、忍は食事を再開するのだった。

忍の家は代々陰陽道の使い手の家系で、簡単に言えば『陰陽師』である。しかも、陰陽師を束ねる『陰陽寮』の次代当主でもあった。

翔は俺に視線を移す。

「んじゃ、海は？」

「俺？ ー、今日は……」

俺は壁に掛けられたカレンダーを見て、日にちを確認する。

「ありや？ やっべーえ。今日は叔父さんの家に行かなきゃ……」

「えーっ。そんなん行かなくなったっていいじゃん！」

「あのなー、そう言う訳にもいかなーんだよ。ここ数ヶ月定期茶会をサボってたから、そろそろ顔出さないと不味いんだよなあ」

俺はハムエッグをつつきながら、翔の言葉を却下する。

俺の叔父は茶道光月流の家元であり、親父は画家をしている為に

海外に仕事へ出掛ける時は良く長期に渡って叔父の家に預けられていた。とは言っても、俺の家はただっ広い敷地内に日本家屋と、庭園と、林を隔てた向こう側に建っている洋館が自宅である。日本家屋は叔父の家なので、預けられていても自宅に行き来していた。叔父夫婦には子供がいない為、俺を自分の子供の様に扱ってくれた。

「折角、皆で遊園地に行こうと思っていたのに……」
翔は残念そうに不貞腐れる。

「仕方が無いですわ。二人とも予定が有るのですし。今回は、三人だけで行きましょう」

ニツコリと微笑んで、ティアが翔に言った。

「ん。そうだね。夏休みはまだまだあるんだしね！」

頷いて応える翔であった。

「ごめんな、ティア」

俺の言葉にティアは、首を振って応える。

「いいえ、お兄様。でも、次は一緒に行って下さいね」

「分かったよ」

頷いて応える俺に、ティアは微笑みを向ける。俺の横で黙々と食事続ける忍と、遊園地で何に乗るとか、もう騒ぎ始めている翔を微笑ましく見詰める雷。

いつもの日常が、そこに在った。

月のない夜は・・・

「げっ、まだ帰って来てねえのかよ!？」

叔父の家から帰って来た俺は、カントリー風な造りの真っ暗な家を見て呟く。

今日は満月なのだが、厚い雲が夜空を覆い隠していた。そのおかげで、俺の身体が女性体に変化する事は無かった。

俺の身体は、前世の記憶と力が覚醒した時の副作用で肉体が女性に変化してしまう様になったのだ。ただし、満月の光を浴びなければ肉体は変化しない。裏を返せば、満月の光で変わる。

まったくもって、迷惑な現象だ。

「まあ、いいや。とつとと、夕飯の支度をしねーと帰ってきた時、翔の奴がうつせーかな」

「ごそごとズボンのポケットから鍵を取り出して、玄関の鍵穴に差し込んで回す。

カチャリと、軽い金属音がして鍵が開いた。

その時だった。

何やら背後で、殺気のような鋭い『気』が感じられる。

その直後、カツ！ カツ！！ カツ！！！！ と、玄関のドアに短剣が突き刺さる。

「おお、危ねえ。危ねえ」

俺はあっさりそれを避けて大袈裟に言う。

でも、別に大して危なく無かったが。

「まったく。誰だか知ねーが、俺にケンカを売るとはいい性格してるなあ!!」

言いながら短剣を片手で抜く。

「ええッ!？」

俺は闇を睨み付け、それを投げ返す。

「きゃー!」

女性の悲鳴がして、そこから二人が飛び出して来る。

中性的な感じのする同じ顔のこ娘達であった。辛うじて、ショー
トカットとボブカットの髪型違いで判断出来た。

ボブの女の子が口を開いた。

「私の名は、ア ril。こっちは、リアナ」

と、自己紹介をした。

「お……女？」

俺は目の前に居る二人をまじまじと眺めてしまう。

実は俺、この地域を仕切っている不良グループの裏総長をやつて居る為、男にケンカを売られる事はしばしばあった。本当は総長なんて嫌だったのだが、ずっと前にグループの一部を注意して止めたら、ケンカになってしまい、片端からノシてしまったのが事の始まりで、それが更なる次のケンカを売られる結果となった。その果てが、前総長をもノシてしまう事となった。

その後、なし崩しの如く、裏総長に担ぎ上げられてしまったのだ。まあ、最低ラインのモラルを守らせているので、対立抗争など無くしてそれなりに平和になったのも事実だ。それでも時々、それが嫌で俺にケンカを売ってくる奴もいる。

とは言え、女がケンカを売ってくるのは初めての出来事だ。

「何で俺を狙った？ しかも、一歩間違えば死んでるぞ！！」

短剣は確実に、俺の頭と心臓を狙って投げられていた。俺だからこそ、簡単に避ける事が出来たのだ。

俺が信じられない表情で問うと、彼女らはギロツ！ と仇でも見る様な目で睨んだ。その迫力に俺は、一瞬呑まれる。

「あら、パール。貴方は私達を忘れてしまったの？ まあ、いいわ。記憶が蘇らない内に、死んでもらうわよ！」

リアナが鋭く言い放つ。

「えっ！？」

俺は聞き覚えのある、その名を耳にして呆然とした。

「死ね！ パール！！」

えんほう がだん 焰砲牙弾ッ！！！！！！

ボアアアア……。

彼女の手の内に炎が現れると、バスケットボール位の大きさに凝縮されて炎の球となる。それが俺に目掛けて放たれる。

「チイツ！ 出でよ、氷竜剣ひやうりゆうけん！！！」

バツ！ と、俺は手を前に突き出し叫ぶ。

翳した掌の前に、勢い良く白い冷気が吹き荒れる。俺に向かって来る火球と、冷気がぶつかり合う。

「何ッ！？」

彼女達が驚きの声を上げた。

「お前ら馬鹿か？ ケンカ売るなら、相手を見てからしろよな！」

白い煙が風に乗って消えてゆく。二人のぎよつとした表情が、俺を見ている。

「……ったく。勝手に人を殺そうなんて、決めんじゃねえよ！！！」

俺はムツとしながら言う。右手には凍気を纏った剣『氷竜剣』を握って。この氷竜剣は、精霊界で出会った氷竜と契約して、ゲットしたものである。

「それに勝手に勘違いされて、殺されたかねーよ！」

「勘違いですって？ ふざけないで！」

殺意剥き出しで、ア ril が叫ぶ。

「とてつもない勘違いだ！」

「私達の故郷、アトランティスを破滅へと導いた一人のくせに！！！！！」

ギリリッ！ と、ア ril の瞳に光が宿る。

俺の反論を聞く耳持たない状態で、彼女達は距離を取ると俺を挟み撃ちにする。

彼女達の両腕に巻き付く様に炎が現れ、音をたてて燃え上がる。

「喰らえーッ！ 鳳神炎蛇ほうしんえんじや！！！」

二人はバツ！ と、俺に向かって突き出す。

「ちよっ……ちよつと待てよっ！！！！！」

ゴオオオオ……。

炎が巨大な蛇に姿を変え、うねりながら俺に襲い掛かろうとする。俺は剣を持つ手に力を込める。

「ハッ！」

タンッ！

地面を蹴って俺は飛び上がり、両脇から来る炎蛇をかわして前方に着地した。しかし、二匹の炎蛇は直ぐ様、螺旋を描き方向転換して一直線に襲って来る。

「あんまりやりたかねーけど……」

カチャッ！！

俺は氷竜剣を横に構え直す。

「氷竜犀封縛鎖ひょうりゅうせいふうさく！！！！」

剣を天に翳すと、氷竜剣の透明な刀身から一匹の氷の竜が出現した。翼と長い胴体を持つ、白さと透明さを兼ね備えた美しい竜。氷竜は荒々しく口を開け、コールドブレス凍気の息を吐いて炎蛇を粉砕した。

「なっ！？」

氷の竜はその体を数匹に変化させ、彼女らの両腕と身体を絡め取っていく。

「きゃああっ！」

「悪いけど、これ以上疲れるのはご免なんでね、大人しくしろよ」

これ以上、埒のあかない押し問答をしても意味が無い。更に、この二人の大きいなる誤解を解かなくてはいけないのである。

「そ、そんな……私達の力が通用しないなんて」

リアナが愕然とした表情で呟いた。

「あのな……あ。通用する、しないの問題ないだろうがっ！ 第

一、俺は『パール』じゃない！！ それ自体が大間違いだぞっ！」

「だから何？ 貴方はまだ記憶を取り戻してないだけよ！」

アシルが俺を睨みながら言った。

俺は頭を掻いて言い返す。

「あ……っ！ もうっ！ 俺は本当にパールじゃないんだよ！！！」

「証拠があるとでも言うの？」

「あるには、あるんだが……」

俺は溜め息を吐きつつ、空を見上げて言った。

月も星の輝きも、暗い闇が天を覆って全て隠してしまっている。

これでは、見せたくても証拠を見せられない。

「ちっ……どうすりゃいいんだよ……」

頑固な彼女達を見遣ってから周囲に目を泳がせると、暗闇の中から楽しそうな声と足音がこちらに向かってくる。

「ん？」

俺はそちらに顔を向け、闇の向こうを凝視する。

そこには、己の良く知った人物を確認出来た。

「おっ！ イイとこに帰って来てくれたじゃねーか」

「お……お兄様」

ティアがぎよつとこちらを見詰めて言った。その横で同じ様に、この有り様を雷と翔が、俺と彼女達を交互に眺めている。

「海……この有り様は一体何なんだい？」

雷が静かに問い掛けてくる。目が少々怒っている様に思えるが、

嘘を言っても仕方がないから本当の事を言うだけだ。

「見りゃ解かるだろ？ 売られたケンカを買っただけと、言うか……」

…一方的に彼女達が仕掛けてきて、俺の話が聞かないんで、こう言う事態になっただけ」

そう、言い返すしかない俺に。

「そう……でしたら、どうして氷の鎖なんて物をさせられているのかしら？」

ティアが目敏く、彼女らを拘束している鎖を指して言う。

「それは、こいつらも普通じゃない力を持ってるとし、こつでもしなきや俺の話聞いてくんねーんだよ！」

「だからと言って、女の子にこついう事するの？ 見損ないましたわ！」

キッ！ と、俺を見据える妹の気迫に気圧される。

「そんな事言われてもなあー。俺を殺そうとしたんだぜ。しかも、パールだと間違えてだぞ？ これ以上、俺にどうしろって言つんだよ？ こっちだって怪我したくねえし、させたくないからそうするっきゃねえじゃねえかよ」

首を竦めて俺が言っていると、ティアは釈然としない顔でじつと見詰める。俺とティアの遣り取りをポカんと、ア Ril とリアナが見ている。「なあなあ！ オレ、話が良く判んねーけどお……どーゆーこと？」キョトンとした表情を雷に向け、翔が問い掛けた。

「翔……そんな事よりも、もう少しこの状況を何とかしようって思わないのかい？」

「え？ なんで？」

「……」

翔の言葉に、頭痛そうな顔をする雷であった。

常識人の彼は余りにも非現実的で、しかも兄妹喧嘩に発展しそうなこの現状を気に病んでいるのである。それだけと言う訳でもなく、誰かに見られてしまうのを恐れていた。

でも、丘の様な高台に建てられた一軒家なので、人が来る様な事は滅多に無いからさほど心配無いので有る。しかし、そこはそれ雷は心配性な性分だから仕方が無いのかもしれない。

「ったく。翔も、海も、ティアもこんな所で騒いでる場合じゃないって分ってる？」

「あつ……悪いが、詳しい事は中で話すつて事で良いよな？」

俺はア Ril とリアナに問い掛ける。すると、悪びれもせずリアナが口を開いた。

「不本意だけど聞いても良いわよ」

雷達が彼女達を玄関へと招く。

「……」

ドアの向こうに吞まれて行く彼女達を見ながら、何故か落ち込んでしまう自分がここにいる。

「知らないってのは、やっぱり誤解を招くしかねーんだろうか……」

俺の弦きが、夜の闇に溶けて消えた。

王子様はご立腹？

「アリル、リアナ！ お前達何で俺の指示を待たずに勝手な事をしたんだっ！！」

忍の怒声が皇家の客間に響いた。

ビクン！

アリルとリアナが、肩を竦ませてソファアーの上で縮こまる。

「ですが、王子！」

「言い訳は聞きたくない。お前達がした事は明らかに命令違反だ。しかも、確証が無いのに他人を傷付けようとしたのも事実。そしてその相手が『シアーナ』だった。それで万が一の展開が起きたらどうするつもりだったんだ？」

冷たい瞳で忍が言った。

権力者、支配者、『王』としての威厳と言うのが、ぴったりハマるそんな雰囲気を持つ忍を俺は、一人で出入り口の所で壁に寄り掛かって見ていた。

雷と翔とティアの三人は、その状況に絶句してしまっている。

まあ、忍が声を荒げて怒る事は滅多に無かったが、流石にここまで厳しい言い方では助け舟を出そうにも、竜巻の中に飛び込む様なもので、誰がそんな無謀な事が出来ると言うのだろうか……。

彼の恐ろしさは公然の秘密と、言った位だというのに。

「もっ……申し訳御座いませんっ！」

バツ！ と、ソファアーから下りると彼女達は、同時に額を絨毯に擦り付けて忍に土下座をして謝る。

「我ら二人、如何様な処罰でもお受け致します。王子のお好きな様にして下さい。我らは、王子に命を捧げておりますゆえ……」

「そうか。では、お前達の望む通りにしてやるっ」

眉一つ動かさず、冷徹に忍が言う。

コオオオオオ……。

忍の右手の内に紅の炎が現れると、一本の剣を形取っていく。

「覚悟はいいな？」

忍ぶの持つ『炎の剣』は、彼女達の頭上に揚げられ、振り下ろされ様としている。

俺はその光景に、背中がぞくりとなる。

「し……忍ッ！」

思わず俺は声を出した。その声に反応して、忍がこちらを見遣った。

しかし、声を掛けたのは良いが、どう言葉を繋げばいいのか分からなかった。

そんな俺を冷やかな瞳で見詰めから、忍は口を開く。

「海。お前、俺が本気で剣を振り下ろすと思ってたのか？」

「う、うん」

「あのな」。いくら何でも、下ろしても寸止めするに決まってるだろ。ま、一応、ケジメはつけておかないとな」

そう応えると、忍の表情が穏やかに緩む。

それを見て、俺は正直言っただけとってしまった。

無論、翔も雷もティアも気が気でなかったに違いない。三人とも顔が、引き攣っているのが何よりの証拠だ。

「忍……その性格直した方が良いんじゃないか？ ケジメたつて、限度ってモンが有るだろ！ その内嫌われるぞ」

俺の台詞に、忍がニヤリと笑って言う。

「じゃあ、誰が誰に嫌われるか言ってみろよ。海」

「お前が俺に嫌われる。で、どうだ？」

俺が負けじと言い返す。

「ほう。シアが俺を嫌いになれるのか？ それはそれで、見てみないな」

忍が自信たつぷりに、口の端で笑う。

「やっぱ、お前って……性格悪い」

「今頃気付いたのか？」

ふふん、と嫌味つたらしく笑って言う忍を俺は、悲しみの様な怒り感じられずにはいられなかった。

「本当に嫌いになってやるっ……………」

ボソリと呟きつつ忍を睨むが、それを知った上で包み込む様な『支配的』な瞳と、微笑の内に秘められた『優しさ』を忍は俺に返す。俺と忍の距離はまあまあ有ったのに関わらず、俺の呟きが聞えていたらしく、余裕で応える。

「どうぞ、お好きなように」

「ああ、そうかよ！ そんじゃ、本気で嫌いになってやるよ！」

ふんっ！！

俺が息荒く言うと、

「素直じゃないと後で後悔するぞ、海」

勝ち誇った様な笑みを零して忍は笑った。

「だあーれが、素直じゃないっ！？俺は言いたい事を素直に言っただけだ！昔と大違いに捻くれたのは誰だよ！！美しい思い出がボロボロだよな……………まったく」

俺は感傷に浸りつつ言う。

すると、俺に向かって野次が飛んで来た。

「何ですってツ！ラリス様は今でもお変わりなど無いわ！！」

「へ？」

「誰であろうと、王子を侮辱する事は私達が許しません！」

「はあ？」

凄い目付きで俺を睨む、ア Ril とリアナ。

俺はちよつと間の抜けた声を上げて、彼女達を見る。

双子の瞳には、忠誠心と言うだけではなく、明らかに他の感情が込められた色をしていた。

「二人とも、誰に向かってその台詞を言っているのか、もう一度確認した方が良い様だな」

蛇に睨まれた蛙とまではいかないが、俺と彼女達の間で膠着状態が出来てしまいそうになるのを、忍がさらりと一言で崩した。

「あつ……そうでした……すみません」

二人が同時に忍の顔を見て、下を向くのだった。

「な……なんだかな……あ」

俺は忍に絶対服従の彼女達を理解できる様な気もしながらも、やっぱり出来ないでいた。

それは、俺自身が理解してしまう事で、俺と忍の関係に変化が生じてしまう可能性を頭の何処かで感じているからかもしれない。

「ア rilル、リアナに命ずる。今後、この様な事が無い様に注意する事。分かったな？」

忍が命令を二人に下す。

「はい」

彼女達はかた膝を着き、恭しく頭を下げて答えるのだった。

闇に潜むもの

丑三つ時。

暗い暗い深遠の闇が支配する夜。

天空には霞みがあった、細い三日月が夜闇の魔に抵抗するかの様に光を発していた。

ザザッ！

ザザザッ！！

その闇の中で、何かが屋根伝いを人間技とは思えない速さをもつて跳んで行く。

それは、さびれた工場へ入って行く。

工場内は、もうとつくの昔に閉鎖された事を物語る様に荒れ果てていた。

「クククク……手に入れたぞ。白の『力』と『魂』を持つ人間の娘を」

不気味な声を上げ、肩に担いでいた歳は十四位の黒髪の少女をコンクリートの上に下ろす。

そいつは明らかに、人間の姿をしていたが、人とは異なる異質な存在であった。眼は赤く飢えた色をして、夜の暗闇でも赤く不気味に光っているのである。

「この娘を喰らえば、俺の力がより強くなる。魔界の王になる事も夢じゃないな……」

クククククと、気味悪い声で笑う。

「へーえ、そうなんだ。そんな理由で、お前らは女の子を攫っていたのかよ」

その声は、大して驚きもしない冷やかな口調で降ってくる。

ギラつく赤い眼が、頭上を仰ぐと中二階の通路の鉄枠上に少年が平然と立って、大きな窓と三日月を背に赤い眼を見返している。

彼は長め漆黒の髪を後ろで縛っていて、右手には日本刀を持ち、口元に薄い笑みを浮かべている。

しかし、少年と言うには、少し大人びた風体をしていた。

「何だ貴様は！」

「何だと言われましてもねえ……俺はただ、その子に用が有るんで、渡して貰うよ」

少々おどけて彼は、赤い眼のそいつに告げると、スラリと剣を抜く。その日本刀の刀身は、銀色に光っておらず、闇に溶け込む漆黒色であった。

タンッ！

彼は鉄棒を蹴り跳んで、そいつの側に着地する。

「ふざけるなああああああッッッ！！」

喉を潰した声を上げ、そいつの身体がベキベキと嫌な音を発して皮膚と服を破り、毛むくじらな狼男へと変貌を遂げる。

「なんだ、狼男かよ」

あっさりつつまんなそうに彼は言う。

狼男は空気を切り裂く様な叫びを上げて、彼に襲い掛っていく。突進して来る狼男をひょいっとかわし、剣を横一線に振るって狼男の上半身と、下半身を分けて断ち切ってしまう。

「ぐがががッッッ！！！！」

狼男は茶褐色の血液を撒き散らしながら、コンクリートを引っ掻きのたうつ。

「貴様っ……一体何者だ！？」

「黒羽龍斗（くろはねりゅうと）。只の高校一年生さ」

そう言うのと、只者ではない彼は何の躊躇も無く、のたうち回るそいつの頭に刃を突き立てる。

「があっ……！！」

鈍く潰れた悲鳴を上げて、狼男の息が事切れる。

シューウウウウウウ……。

水蒸気が発生するかの様に、狼男の二つに分かれた身体が煙りに

なつて消えていく。

その後に残ったのは、茶褐色の血溜りであった。

ブンッ！

剣を振るい刃についた血を払って鞘に収めると、龍斗は気を失つて横たわる少女の側に行くと、膝を着いて彼女の胸元に右手を翳す。

「……………我が声を聞け……………黒き闇より出でよ……………時の彼方に封じられし魂よ、我は汝を求める者なり……………我に応えよ」

ポワアア……………。

淡い暖かな白光が、彼女の全身を光らせてゆくが、急速にその輝きが小さくなり消える。

すると、少女の胸から白く輝くビーダマ位の宝玉が現れた。

ふわふわ浮くその宝玉を確認すると、龍斗は掌を返し一旦軽く拳を作り、ゆっくりと開く。開いた手の中に、十センチ大の琥珀色に輝く珠玉が現れた。

寄り添う様に、白く光る宝玉がクルクル円を描きながら、琥珀色の珠玉の周りを回る。

珠玉は龍斗の手を離れ、上へと浮上して行く。ゆらゆらと揺らめく炎の様に、琥珀色の輝きを発ち上げらせて……………。

それを追う様に、龍斗は立ち上がる。

「……………」

輝きは龍斗の線辺りで止まった。ゆらゆらと不思議な光を放ちながら、それは人の形を成してゆく。

綺麗な大人の女性の姿を……………。

波の様に揺れる銀色の髪と、蒼く悲し気な瞳が、龍斗に向けられる。

「……………ナ逢いたかった。この日が来るのを俺は、ずっと……………ずっと待っていた」

「私もです。遥か遠い日から……………」

悲しい位に切ない笑顔を龍斗に向ける。

彼女の瞳から涙が一雫頬を伝う。龍斗は右手を彼女の頬へと伸ば

す。けれど、透けた彼女の身体に触れる事は叶わない。

しかし、時として想いは何物をも凌ぐ。

触れ合う事は出来ない筈なのに、龍斗は彼女の涙を指先で拭うのであった。

「もう少しだ……後少しで、君の魂魄が総て揃い、もう一度一つになる日が来る。だから、待っていてくれ」

龍斗の真剣な表情に、彼女は優しく微笑んだ。

『はい。幾星霜の時が過ぎても、私は、貴方だけを待っていたのですから……』

スウツ……。

にっこりと微笑む彼女の姿が、徐々に消えてゆく。

そして、空中に浮いていた白い宝玉が、琥珀色の珠玉に溶け込む様になつた。

龍斗が手を伸ばすと、呼応する様に珠玉は彼の手の内に納まった。

龍斗はとても悲しそうな瞳を伏せ、珠玉を大切そうにそっと、己の胸に引き寄せた。

「必ず、必ず……君を蘇らせる……待っていてくれ。ラティナ……」

彼の辛そうな呟きが、暗い工場内にこだまして消えた。

時迫りて・・・

時が満ちてゆく……。

……約束の時間が近付いてくる。

海……貴方の目覚めの時はもう直ぐ……。

「……だれ……？」

霧がかかった思考の中で、俺に誰かが呼び掛けてくる。

「……う……ん」

重たい瞼をゆっくりと開き、俺は歪んだ視界の中でぼーっとした意識を明確にしていく。

目に飛び込むのは、暗闇の世界だった。

でも、それは当たり前前の事だった。何故なら俺は、自分のベッドで寝ていたのだから。

ベッドの脇に置いてある目覚し時計は、午前二時を示していた。

「……？」

俺は右側の方へと視線を移す。そちらでは、同じベッドが置かれ、忍が静かに寝ていた。その先には、カーテンに遮られつつも、月の光が部屋をぼんやりと明るくしていた。

「……何だったんだ？ 夢？」

夢にしては起きた途端、綺麗に忘れてしまつて、雲を掴む様な……消化不良なモヤモヤとした感じで納得いかない。

それに……誰かに起きると、言われた様な気がしてならない。けれど、何も無い。

「……」

狐に摘まれたそんな気分だった。

不可解な気持ちのまま、俺は何気なく忍を見遣った。

「……どうした？ 眠れないのか？ 海」

寝ているとばかり思っていた忍が、俺の方を向いて問い掛けてくる。

「なっ……寝てたんじゃ？」

びつくりして俺は忍に訊くと、忍は静かに答えた。

「何と無く気配で起きた……って言うのは嘘で、お前の声で起きただけだ」

忍は上半身を起こし、静かにベッドから出ると俺の横へ座る。

「お前さ……俺に何か隠し事していないか？」

「え……？ 何をだよ？」

きょとんとして俺が忍を見返すと、ちょっと困った表情を浮かべた。

「……正確には、シアーナであつた頃のお前だよ」

「シアーナ……の頃？」

俺が困惑した顔で言うと、忍は頷いて言った。

「そつだ。俺は色々考えたんだが、どうも腑に落ちない点があるんだ。あの預言者ラフェーサ・リーズが何故、アトランティスの滅亡を予言出来なかつたのか。そして、伝承歌の意味。白竜王、別名白竜姫『シアーナ・リユース・ティア』と、炎竜王『ラリス・リユース・ティアナ』の二人は確かに、竜王の称号と力と記憶を受け継いだ。憶えているよな、海？」

「ああ。確か……白竜の城でだつた」

「俺は炎竜の塔で、お前は白竜の城。じゃあ、黒竜王バルド・ブラッド・ダークは、何故黒竜王の名を得ていたんだ？ おかしいと思わないか？」

「ああ……」

そう言われてみればその通りである。

魔法文明が発達したアトランティス大陸では、それぞれの力の象徴を掲げる竜王の名を戴くには、神託者が選びだし、その案内によつてのみ、力の封印守護された場所へ赴ける。そして、大いなる力

と、歴代の竜王の記憶と称号を受け継ぐ。

しかし、竜王の名称を持った場所は五つしか、アトランティスには存在しなかった。

光を司る、光竜。

風を司る、風竜。

水と命を司る、水竜。

炎を司る、炎竜。

調和と増幅を司る、白竜。

光、風、水、炎の四つは、東西南北を守護する結界の役目も兼ねていた。その結界の中心に、白竜の城が存在していたのである。

故に、黒竜の名などアトランティスには、存在していなかった。

「だが、あいつは黒竜王の名を持ち、その強大な魔力で五つの国の内、三国を己の手中に収めた」

静かな忍の口調の中に、悲しみにも似た怒りが存在するのを俺は感じていた。

沢山の魔法使い達が束になっても、誰一人として黒竜王に勝てなかった。そして、シアーナの故郷リユース国に、黒竜王が提示してきたのは、シアーナを差し出せばリユース国と、シアーナの婚約者がいるティアナ国に手出ししないというものだった。

それを伝えに来た使者であり、黒竜王の側近の者こそが『パール・ディザ』……シアーナの実弟であった。

シアーナはパールから初めてその事実を聞かされて、父王を問い詰め……母にまつわる真実を知った。

途方に暮れるシアーナに、パールは追い打ちを掛けていく。パールの手によって父王は殺され、シアーナもまた黒竜王のもとへと連れ去られ　あの悲劇が起こった。

俺はその時の事を思い出し、遣る瀬無い気分陥り、視線を忍から窓の方へ移す。

「なあ、海。俺は、アトランティスに伝わる白の伝承歌にある『黒

「き安らかな闇」とは、黒竜王を指していると思うんだが……もし、そうなら、俺達が知らない所で黒竜が封印守護されていてもおかしくないんじゃないか？ 例えば、地下洞窟とか……」

「……もう、止めよう。その話は」

俺はその先を続けようとした忍を制した。

「どうした？」

不思議そうに問い掛ける忍に。

「気分が悪い……」

俺は視線を外したまま、そう告げた。

忍と一緒に考えていて、何故か頭の中でそれ以上考えるな、それ以上詮索するな、という警戒にも似た寒気が俺を襲う。

「大丈夫か？」

心配そうな声と共に、忍の手が俺の頭を優しく撫でる。撫でられた所から、すーっと憑き物が剥がれていくそんな気がした。

「悪い……嫌な事を思い出させて……」

済まなそうに忍は俺に言ってくれた。

「気にしてねえよ。それより、シアに会いたいか？」

「どうしたんだ、急に？ いつもはなるの嫌がるクセに」

「会いたくないのかよ？」

ちよつとムツとして、俺は忍に言った。

「……別に。姿が変わっても、お前に変わりは無いだろ？」

忍は、あっさりと応えた。

確かに、忍の言う事は一理ある。

けれど……。

「何だよっ！ 折角、俺がなってやって良いつて言ってるんだぞ！」

俺は忍の手を振り払い、顔を上げて言うと、忍は平然とした顔で俺を見詰めている。

「何だ、元気じゃないか。それよりも、海、あんまり大きな声出すと皆が起き出して来るぞ？」

「……何だよ。本当に会いたくないのかよ……俺は……」

「……海。俺は、勿論、シアーナを今でも愛している。それと同時に
お前も愛してる。そうだろ？ 二重人格で姿も変化する訳じゃないし、
お前の場合は、姿が変わるだけで中身は同一人物だろ？ それとも、
シアージャなきゃ話せない事でもあるのか？」

忍はさらりと愛の告白をしつつ、俺の揚げ足を取っていく。

「……やっぱ、お前って意地悪だ。ラリスの時の方が絶対優しかった」

「そうか？」

正座状態で睨み付ける俺に、忍は至って平然に応える。

そして、忍は俺のベッドに上がって来る。

ギシッ……。

ベッドが重みで軋んだ音を発てる。

「……なんだよ」

何だかヤバイ雰囲気……。

俺は直感的にそう思った。

「俺が誰にでも優しくしたら、お前は怒るだろう？ それに、俺は
好きな奴にはちゃんと優しくしてやるよ」

「嘘ばっ……んっ……」

俺は悪態を吐いてやろうとしたが、忍の唇がそれを塞ぐ。数十秒
して、俺は忍から解放された。

「……？」

忍は無言でベッドから下り、窓際に進んで行く。それから、黙っ
たままの俺の方へ向き直り、忍は言葉を紡いだ。

「……まあ、お前が本当に何を考えているかなんて、俺には解らな
い。だが、一人で何でも抱え込んだって、また同じ過ちを繰り返す
だけだぞ？ シアーナの時に思い知らされたんじゃないのか……海」

ザッ！！

忍はそう言うと、カーテンを両手で勢い良く左右に開ける。

黄金色の満月の発光が、部屋の半分を満たす。

「……っ！ ……んっ……」

その光は、俺の所にも届いた。
そして、それは、十数秒の出来事であった。
ポアアアアツツ!!!!

月光の輝きに呼応して、俺の身体が月白色の輝きを放つ。始めは髪から変化していった。

座っていても、シートに着く程のサラサラのストレートの蒼く、井天藍色の長い髪。『俺』よりも細く華奢な肩、腕、細い指。

そして、身長も低くなっていた。

なによりも『俺』と違うのは、女性体であると分かる少し小さめな胸と、肉体の総てが骨格に至るまで変化をしていた。

「シアーナ」

手を差し出し、忍は俺を呼ぶ。

月に照らされて優しく微笑みを浮かべる忍は、紛れも無く『ラリス』だった。俺は辛くて、瞼を閉じた。だけど、逃げたくて閉じたんじゃない。

そう……思い知らされたんだ。

ラリスを……何よりも、誰よりも好きで、愛している事を。

例えそれが、悲劇を生む結果となったとしても。

瞼をゆつくりと開け、俺は満月の下で微笑む忍を見詰める。

「……ラス」

俺の口から紡ぎだされる声は、綺麗なソプラノを奏でた。

ベッドから滑り落ちる様に下りて、穏やかな足取りで一歩一歩確実に忍の所へ近付く。

俺は気が付くと、忍の腕の中に吸い込まれる様に飛び込んでいた。

「シア……」

俺を抱きとめた忍が優しく名を呼ぶ。

「ラス……御免……俺は……」

「いいんだよ。シア……君は苦しまなくていいんだ」

「でもっ！俺っ……」

優しく諭す様に忍は言うが、俺は顔を上げて訴える。

「……何をそんなに怯えているんだ？　これから起こりうる事に怯えても何の解決にもならない。違うか？　それとも他に俺が知らない事で、悩んでいるのか？」

「……ない……」

「えっ？」

「解らない……んだ。シアーナの記憶には無いのに、何故か『危険』だと感じる。でも、それが何なのか俺には解らない。どうしてだ！　俺は、シアーナの記憶を心を持つてる。だけど、総てじゃない……」

「……海？」

忍は驚きよりも心配した表情で、俺を見詰めていた。

時折、俺の指先が震える。でも、それは寒さからじゃなく、怖れからだった。

「時々……解らない事がある。気持ちも、行動した事も確かに真実だからだった。ラスがバールに殺されそうになった時、バールとお前を止めたくて、助けたくて……自分から剣の前に出た事も。自分が死ぬその時の想いだってちゃんとある。なのに、どうして、白竜の記憶が殆ど無いんだ？　何で、自分が考えた筈の記憶が解らないんだ！　原因と始まりと終わりは解るのに……それに、もっと、大事な『何か』があつた筈なのに、何で何にも思い出せないんだッ！！」

気が狂いそうになる切なさも、愛しさも、苦しみも、心に刻み込まれている。

なのに、俺は『大切な何か』を忘れている。

「おい、海。大丈夫か？」

忍の心配そうな顔が、近くにある。

瞳に飛び込む、変わらない優しい瞳の色。

「……忍……」

何かを、俺は言いたかった。

けれど……言葉にはならなかった。

バチイツ!!!

頭の中で電流が流れる様な、何か弾け飛んで俺の思考にドツと押し寄せる。

『時はまだ満ちない』

『思い出してはいけない』

『忘れている』

『まだ、そのままでもいいなら……』

『その時まで』

「うつ……ああ……ああ……ツ!!!」

押し殺した声を上げ、夢中で忍のパジャマの衣をきつく掴んでいた。

「お、おい!? 海ツ!？」

「ぶ」

ガクン!

俺の全身から力が抜け落ちる。

気を失い掛け倒れ落ちる俺の両腕を掴んで、忍は自分の腕の中へと抱き止めた。

俺は真つ暗な意識の底へと、落ちて行った。

暗闇の中で、誰かが語り掛ける。

『まだ、時は満ちない。今はまだ、その時ではない』

何が? その時じゃない?

『その時が来るまで、貴方は自由。だから、今はそのまま……』

自由? 俺が?

『だから、考える必要が無い。苦しむ必要など無い』

考えなくていい?

『いずれ訪れるその瞬間まで』

いずれ来るその時まで？

『そう……だから、帰りなさい。あの人のところへ』

声が急速に遠ざかってゆく。

「……海！ 海！！ しつかりしろッ！！！」

ペチペチと、誰かが俺の頬を叩く。

頬に走るその痛みと、呼ぶ声で俺は暗闇から戻って来れた。歪んだ思考回路の中で、焦り顔で俺を覗き込む忍を見付ける。

何故か、俺はホッ……として無意識に微笑んでいた。忍もそれに返すかの様に、微笑み返してくれる。

ゆっくりと、思考が戻って来るのが解った。

手足に力が入る様になる。

「もう……平気だ。驚かせて悪かった」

と、言う俺の台詞に忍が言う。

「別に。それよりも、どうしたんだ？ いきなり苦しんだかと思うと、意識すっ飛ばすなんて……」

「えっと……うん……それが、良く分かんねーんだ」

右手で額を押さえつつ立ち上がった俺が言うと、忍は頭痛げな表情で俺を見た。

「おいおい。苦しんで貧血起したって言うのか」

怪訝そうな表情で忍は言う。

「あはは……まあ、そうゆー事になるかな」

俺は笑って誤魔化す。

頭の中でした声に従う方が良いと思ったから。また、気絶するの
も流石に嫌だったからだ。

しかし……命令とは違う感じで告げた、あの声は何だったの
だろうか？ 何だか淋しそうに聞えた、あの声は……。

あの淋しそうな、悲しそうな、声に従っておこう。

悪い感じなど微塵も無かったから……だから、もう、何も考えな

いでおこう。それが、俺の為にも一番良いのなら。

「海……」

忍は俺のサラサラな髪に、指を絡ませつつ言った。

「ん？」

「もしも、黒竜王が俺達の前に現れたとしても、絶対にアトランテイスと同じ結果を辿るとは限らない。それに、俺達が転生したのはきつと理由があると思う。俺がいて、海がいるのは、只の偶然じゃない。俺達は過去の過ちを知る者として、二度と同じ事を起さない為に存在しているのだろう……」

俺の長い髪を、忍は口元に引き寄せて口付けをする。

「二度と愛しい人を失わない為に」

囁きに似た、誓いを忍は言った。

「悲しい事は、これ以上いらない……か」

俺は忍の顔を見詰めつつ呟いた。

叶えられなかった想い。

見れなかった明日。

守る事が出来なかった約束。

今は……それが出来る。

夢ではなく……。

現実で……。

「海」

深く深く心に刻まれる様な、俺の名を呼ぶ忍の声に胸が苦しくなる。

忍は俺の顎を右手の人差し指と親指で軽く持ち上げる。

「約束するよ。今度こそ、君を守ると。何が起きようとも」

ふわり。

微笑む忍の瞳に吸い込まれる様に、俺はゆっくりと目を閉じた。

優しく……。

そっと、重なる唇。

俺と忍の時間が、緩やかに流れていく。

やがて来る、明日を迎えるように

。

向こう側とこちら側

「うっ……んっ。あづ……うっ！」

俺は両腕を動かし、もがきつつ重たい瞼を無理やり開けて、自分に起こっている現実を把握する。

ベッドの上で、忍の吐息が掛かる距離に俺は寝ていた。

俺の頭の下と胸の上に、置かれた忍の腕がある。

日が上がり始めると、夏の気温は急激に変化する。それに加えて、忍が俺にのしかかって来る。

「うっっ。熱い」

俺は手を伸ばし、頭の上を探ってエアコンのリモコンを手に取り、ボタンを押す。

ピッ……。

軽い電子音がして、エアコンが運転を開始した。

「……今、何時だ？」

俺は顔を上げ、ベッドサイドに置かれた時計を眺める。

朝の六時になるところであった。

「まだ、五時代かよ……」

眠い目を擦りつつ、俺はぼやいた。まだまだ眠れる時間が、たっぷり有る。だけど、汗をかいたせいか、パジャマが湿っていて何だか気持ちが悪い。

「シャワーでも浴びて、スッキリするか」

俺は忍の手を押し退けて、自分のベッドから脱出をする。

まだ眠っている忍を起さないように、着替えのシャツ等をタンスから引っ張り出して、俺は部屋を後にした。

階段を降りて左に曲がり、浴室のある方へと向かう。

すると、右側の浴室のドアよりも奥の方に、人影が見えた。確かそこには、地下室へ続く入り口のドアがあるだけだ。

「あれっ？」

俺が声を上げると彼女は振り返り、こちらを見た。

「あら、お兄様。お兄様が早起きなんて、珍しいですわね」
くすつと、笑みを零してティアが言う。

「ティア……何でここにいるんだ？」

ティアに問い掛けつつ、俺は浴室のドアを開け、近くに有る籠の上に持って来た着替えを放り入れる。

「これから精霊界へ、行かなければいけないので」
にこやかに言うティアに、俺は怪訝そうに訊く。

「何で？」

「お母様が、何か私に用があるそうなの」

「母さんが？」

「ええ。内容はこちらに来てからって、言っていましたけど」

「ふうん……で、今日帰って来れるのか？」

「大丈夫ですわ。朝食までには間に合いますから、心配しないで下さい」

にっこりと笑顔を見せると、ティアは地下室のドアノブを回し押すと、静かにドアが開く。

入って直ぐに、螺旋階段が下に向かって伸びている。

ひんやりとした空気と、安堵する雰囲気は地下室には存在していた。

実は皇家全体には、悪しきモノが近寄らない様に結界が施されている。その中で、二重に結界が張り巡らされ、神聖に近い地場を作り上げているのが、この地下室であった。

そして、精霊界への門を開ける場の役割も果たしているのである。ティアは壁に手を伸ばして、スイッチを入れると暗かった地下室にぱつと明かりが点く。

俺はティアに続いて中に入る。

「それではお兄様、行って参ります」

そう言うとティアは、螺旋階段を降りて行く。俺は入り口に近い場所で、地下室を見下ろせる螺旋階段の手摺りに腕を乗せて下を見

た。

ティアが地下室の中央に立った。

「ティア！ 母さんに今度、遊びに行くって言うておいてくれ」

俺が告げると、ティアは顔を上げてニッコリと微笑んで応えた。

「はいっ！」

ティアは直ぐ様、俺から視線を戻して正面を向き、大きく深呼吸してから呼吸を整える。

「大気に宿りし水よ、我の声に従いて、持てる力を我に貸したまえ」
ティアが天井に両手を広げると、青い光の粒子が周囲の空間に幾つも輝いて浮き始めた。

「集いて道を開け！ 我を精霊界へと導く門となれ！」

沢山の青い軌跡が集まり、ティアの立つ床に円と文字を描いてゆく。

やがてそれは、魔方陣へと進化する。

「ザハリム・ラ・トゥーラ！」

パアアアッ。

ティアの呪文に呼応し、青く輝く魔方陣は光の柱となって、ティアと共に一瞬の後に掻き消えた。

ヤケ酒？

濡れた髪をタオルで拭きながら、部屋のドアを開けて中へ入る。シャワーを浴びる前につけておいた冷房のお陰で、部屋の中は適度な涼しさになっていた。

俺は冷気が逃げない様に、さっさとドアを閉めた。

「……何か喉が渴いたなあ……」

俺は右側の本棚の左脇の、様々な酒とグラスが置かれた棚の中から、ウイスキーボトルと、手にすっぽり入る位のグラスを取り出し、テレビの前にある丸テーブルの上に、グラスとボトルを置く。

テレビの近くにある小さな冷蔵庫から、氷を一掴み出してクラスの中に放り込む。

カラン。

氷がグラスとぶつかって、小さな音を出す。

トサツ……。

近くのローソファーに俺は腰を下ろして、ウイスキーをグラスに注ぐ。透き通った飴色の液体が、氷に絡み付きながらグラスに溜まっていく。

適度にグラスに注いだ後、俺は正面のベランダに続く窓から射し込む朝日をぼんやりと眺め、グラスに口を付けた。

ほろ苦い味が口の中に広がる。

「ふう……」

小さくても深く、俺は息を吐く。

カラン……。

溶けた氷が、グラスの中で跳つて音を奏でた。

約束……か。

俺を守ると、誓った忍。

前世の時、ウェントウスの丘でラリスから結婚を申し込まれ、シ

アーナはそれを受け入れた。后になると約束した。

けれど、その約束は無残にも引き裂かれた。

花嫁衣裳すら纏う事無く。

ぼそりと、俺は呟く。

「俺には……無理だろうな」

花嫁衣裳を着る事は絶対に不可能だろうし、祝福される事も無いだろう。理不尽だけど、男同士では到底無理難題でしかないんだろう。

でも、俺は、男でもあり、女でもある。

そんな半端者を忍は受け入れても、忍の家族は受け入れない。何せ忍は火鷹家を継ぐ、次代当主で……やはりそれ相応の女性を妻にしなければならぬだろう……。

きつと、俺にはその資格すら無い。

人間としても。

精霊としても。

男としても。

女としても。

全部半分しか無いのだ。

「こんな奴じゃ、無理だよな……」

俺は小さな笑いを一つ零した。

「あの頃は良かったよなあ……。あいつさえ居なければ、黒竜王さえ現れなければ……。俺達は幸せでいられたのに」

俺は懐かしむ様に、瞳を閉じた。

今でも……昨日の出来事のように思い出せる。

あの幸せだった日々を。

ヤケ酒？（後書き）

未成年はお酒を飲んじゃダメ。

遙かなる遠き時代

遙かなる遠き時代　　。

まだ、現世の大陸が存在しなかった頃。
たった一つの大陸が、地球には在った。

そこは……。

神秘の大陸……アトランティス。

アトランティスには、五つの国が存在していた。

東には風を司る、ヴィーナ国。

西には水と命を司る、シャル国。

南には光を司る、リユーア国。

北には炎を司る、ティアナ国。

中央には調和と増幅を司る、リユース国。

魔法文明が発達したその大陸は、沢山の自然と動物と人間達が穏やかに共存していた。

純白の花弁が辺りを舞う中。

お気に入りの淡い碧の装束の上に、空色のローブを身に纏い、井天藍色の膝まである長い髪を、丘の向こうから吹く心地よい風が細波の様に私のローブと髪を靡かせていく。

とても幸せな楽しい気分なので、私は真っ白くな花に埋め尽くされた丘を踊る様に走り回ってはしゃいだ。

「早く、早く！ 遅いわよ、ラス！」

私は早く丘の頂上まで行きたくて、後から歩いて来る一人の若者を急かすように言った。

彼の名は、ラリス・リユー・ティアナ。

ラリスはティアナ国の第一王子で、とても素敵な人でもあった。美しい顔立ちの青年。

物腰も穏やかで、誰隔てなく優しく接する人でもある。

時折、ラリスが私に向ける優しい、透明な深い青色の瞳。私はラリスの、その優しい瞳が大好き。

ラリスが居れば私は、それだけで幸せだった。

「シアーナ姫、あまりはしゃぎ過ぎると転びますよ」

ラリスがクスツ……と、笑って言う。

でも、言葉とは裏腹に、その瞳はただ優しく微笑んでいた。深い柔らかな湖の様に。

「あら、ラス。私は別に転んでも構わなくてよ」

ピタツと立ち止まり、私はクスクス笑って言うと、ラリスは穏やかに応えた。

「シアだけだよ。僕の事を『ラス』と呼び、そうやって茶化すのは」

「当たり前でしょう？ ラスは隣国、ティアナの第一王子ラリス様なんですもの。他の方が、そんな不真面目な態度なんて出来ないでしょう？」

力説する私に、ラリスは苦笑いを浮かべた。

「まあ、シアはちょっとお姫様らしくないな、本当に」

「でもね！ 私らしいからいいの」

につこりと微笑んで、私はラリスに向かって言った。

「それも、そうだな」

「でしょ ほら！ 早く頂上まで行きましょよ」

私はくるりとラリスから背を向け、軽い足取りで歩き始める。

ラリスは私の後から、ゆっくりとついて来る。

「うーんっ!! 気持ちいいっ!!!」

両手を思いっきり広げて、全身で風を受ける。

「ねえ、ラス。ウエントウスの丘の伝説を知ってる?」

背を向けたまま、私はラリスに問い掛けた。

「ああ、知っているよ。その昔、結ばれる筈の無い恋人同士が、永遠の約束を誓い合い、沢山の壁を乗り越えた後、もう一度二人はこの場所で、約束を果たす……そう言う言い伝えだったよね」

「ねえ、ラス……」

「何だい?」

「昨晚のラス、凄くカッコ良かったよ」

私は肩口で留めている、空色の薄布で出来たローブを外してバサツと左右に広げて風に靡かせる。

ひらひらと、波打つ様にローブは風の中で踊る。

私は自分で言った言葉がやけに照れ臭くて、後ろを振り向く事が出来なかった。

昨夜はリユース国の宮殿にて、私とラリスの婚約の儀式が行われたのだ。晴れて私とラリスは、正式な婚約者になった。その儀式の時のラスは、とても素敵で凛々しくて、つい見惚れてしまった位なのだ。

「……それを言うなら、シアも綺麗だったよ。それに、いつになく可愛かったよ、相変わらず子供っぽい笑顔は健在だったけど」

クスクス笑いながら、ラリスが言う。

「もう! ラスったら! 人が折角誉めているのに!!!」

チラッと顔だけ振り返って言うと、ラリスは柔らかい日差しにも似た笑顔でこちらを見ている。

「~~~~っ!!!」

ビククリして、視線を元に戻してしまった。

「シアーナ、愛しているよ」

ふわり……。

ラリスの言葉と共に、後ろから抱き締められた。

「ら……ラスッ！」

あたふたとしてしまう私を知ってか知らずか、ラリスは耳元で小さく笑いを零し、私に問い掛けてきた。

「シアは？」

どきん！

私の身体に電気が走る様な、感覚が駆け巡った。

「あのッ……ラスっ！」

慌ててしまう私に、もう一度、ラリスは優しく訊いてくる。

「シアーナ、答えて」

「……ラス……私は。私も、貴方を愛しているわ」

ゆっくりと、でも、確実に言葉にしていく。

「シアーナ、僕達の婚約はある意味では、政略結婚になるのだろうけど、僕達にはそんなのは関係無い。これは、僕達が望んで実現した真実なのだから……」

「ええ、そうね……」

私は瞼を閉じて、ゆっくりと答えた。

幼い日の約束。

幼い頃、私は自分自身がそんなに長く生きられないと、言われていた事を知っていた。

先天的に身体が弱く、リュース国とティアナ国の境にある静かな村で、静養を兼ねて幼い時期を過ごした。

住んでいた館は森の近くにあつて、その森で初めてラスに出会った。

ラスは身体の弱かった私に、様々な事を教えてくれた。遊ぶ事の面白さや、時には弱気になっていた私を元気にしてくれた。心を閉ざしていた時には見えなかった周りにある命の輝きを、ラスは私に気付かせてくれたのだった。

太陽の暖かさ。

風の優しさや、強さ。

命を育む水の素晴らしさ。

木々や草花の囁き。

そして

生きる事の素晴らしさを、貴方は教えてくれた。

総てを諦めて、何もかもを否定し、心の扉を閉ざしてしまった私に、勇気を、未来を、与えてくれた。

そして、あの日が訪れた。

ラリスが城へ戻る日が、やって来たのだ。

私は泣き叫んで、駄々をこねてラスを困らせた。

そんな私に、ラリスは言った。

『ボクはティアナの王子だけど身分なんて関係無く、シアが大好きだよ。いつか絶対、シアをボクのお嫁さんにするから泣いちゃダメだよ！ だから、笑ってね。ね、シア！』

あの時、そう言ったラリスの笑顔は、今思うととても可愛かった。そんな、他愛も無い小さな子供の遣り取りだったけど、幼かった私にとっては、勇気を与えてくれるものだった。

そして……再会をした時、私はラリスに恋をした。見違える程に素敵になっていたラリスに。

でも私は、ラリスが幼い頃の他愛も無い約束を憶えているなんて思えなかった。

何故なら、私の為に吐いた嘘かもしれないから。私を元気付ける為にしてくれたのかもかもしれない……そう思ったのだ。

その頃にはもう、小さい頃の時の様に何でも素直に感情を表に出して言う、子供では無くなっていたから。

一国の王女として、表舞台に立っていたからのである。

そして、ラリスもまた私と同じ様な立場であった。

「ねえ。ラスは『約束、憶えているよ』と、言ってくれたよね？」

私はローブから左手だけを離し、そっとラリスの腕に触れた。ラリスの腕の温かさを、しっかりと噛み締める様に。

「ああ」

「その時、凄く嬉しかったの。私の事を憶えていない……って言われたらどうしようって思っていたから」

「でも、憶えていただろ」

「うん。でも……浮気しちゃイヤよ!」

「しないよ。僕の後は君だけだからね」

ラリスは笑って、私に告げた。

「じゃあ、ラス。私がラスの御后様になったら、またここへ来ようね」

私は風で花弁が舞う様を見詰めながら、ラリスに提案した。

「ああ、この丘の花が咲く頃にまた来よう。約束だ」

ラリスは抱き締めていた腕を解く。

ゆっくりと私がラリスに向き直ると、ラリスは優しく微笑む。

「約束、破らないでよ」

そんな私の言葉に、ラリスは口を開いた。

「破らない。ラリス・リユー・ティアナは、シアーナ・リユース・

ティアナ唯一人を永遠に愛してゆくと誓う」

ラリスは、はっきりとそう告げたのである。

永久の約束を。

その言葉に、私の胸は一杯になる。

苦しくて、切なかつた。

だけど、精一杯の想いを込めてラリスに言う。

「私も、貴方を愛してゆきます。貴方だけを……何があろうとも」

心地よい風が、白い花弁を舞い上げていく。

「シア……」

ラリスの細くて長い指が、私の髪に触れる。その行為に照れてしまった私だけど、頑張ってラリスに笑顔を向ける。

ラリスはそつとそつと、私の頬に、瞼に、キスをする。

「好きだよ」

ラリスの台詞に私は目を閉じる。

嬉しさのあまり、切なさのあまり。

そして、苦しきの為に……。

私の胸中を支配する、訳の解らない切なさで閉じた瞼から、涙と
なつて頬を伝つて流れた。

「……ラス……」

うつすらと開けた瞼から見える、ラリスは笑顔で私に言った。

「泣かないで、傍にいるから」

「うん、うん……」

私は自分に言い聞かせるように何度も頷いた。

そんな私の涙をラリスは、親指でそつと拭い去り、私の唇に優しく
自分の唇を合わせた。

パサツ……。

私は右手で持っていたローブを足元に落としてしまう。

落ちたローブを気にせず、震える手をラリスの背中に回して衣を
きつく掴んだ。

離さない様に。

ラリスの唇が私から離れた。

目を開けると、ラリスの優しい微笑みがそこにあった。

風に乗って、足元にあったローブが飛ばされていく。

丘から見える、青く青く澄み渡る空へと流されてゆく。

どこまでも……。

どこまでも……。

運命の齒車

その夜、私はアニメス宮殿の自分の寝室を抜け出して、ラリスの為に用意された部屋の扉の前に立った。

白と黄金を基調とした飾り細工の扉を、私は静かに叩いた。

「はい？」

豪華な扉の向こうで、ラリスの声が返って来る。

ギツ……。

扉を開けて、ちよこんと私が顔を出すと、ラリスはぎょっとして私を見た。

「シア！？ どうしたんだい？ こんな夜更けに」

扉から首を引つ込めてキョロキョロ辺りを見回してから、誰もいない事を確認して、するりと広い室内に滑り込んだ。

「シ……シア？」

窓際で外を眺めていたのであるうか、ラリスは立ったままで私を見詰めていた。

その表情には驚きの色がある。

そんなラリスを知っていて、私はにんまり笑い側へと寄った。

天井には宝石細工の様にカットされた、輝煌石きこうせきシャンデリアに幾つも連なり室内を明るくしている。

右側には華やかな造りの天蓋ベッドが有り、椅子と作り付けの鏡とローチェスト。左側の壁には、突き出た巧妙な造りの暖炉があった。

「ねえ、ラス。ラフェーサの所へ行かない？」

ラフェーサとは、予言者ラフェーサ・リーズの事である。

彼女はリユース国一の予言者であり『白竜の城』の守人でもあった。

そして、私とラリスの友人でもある。

「シアーナ……そう言う事は、昼間に言うものじゃないのかい？」
少し頭を抱え気味に、ラリスが言う。

「言わないわよ！　だって、白竜の城は月夜の晩行がなくちゃ霧囲
気出ないもの！」

強気に言う私に、ラリスは負けを認めた様だった。

しかし、納得がいかない風でもあった。

「確かに、今日は満月……夜道とは言え、明るいだらう。でも、本
当に行く気なのかい？」

「行く。ラスと一緒に行ってくれないなら、一人でも行くわよ」

私の顔をじつと見てから溜息を吐き、ラリスは口を開く。

「お供いたします、シアーナ姫様」

私とラリスは、こっそり馬を一頭拝借して宮殿から脱出した。

満月の夜は思った以上に明るい。

「ラス！　もつと速く馬を走らせて！！」

頬にかかる風がとても気持ち良くてラリスに言う。

「こらこら、また我儘を言う……」

ラリスは呆れた様に、でも楽しそうにクスクス笑った。

「えー、駄目え？」

す……っ。

私がラリスの胸にしがみ付いてねだると、優しい声でラリスは諭
す様に答えた。

「あのね、危ないだろ？　いくら僕が手綱を持っているからと言っ
てもね……」

「んー」

私はしょんぼりして俯く。

すると。

「それに……シアに何かあったら僕としては困るからね」

「ねえ、困るだけ？　それ以上の感情は無いの？」

上目遣いにラリスを見詰めて、私はラリスの服をぎゅっと握って
問い掛けた。

「シアは僕を信じられないのかい？ いったって僕は君の事を心配してるんだよ。結構、お転婆な所があるからね」
くすくす笑って、私の問い掛けに答えた。

「……………」
痛い所を突かれ、私は沈黙してしまう。

「ほら、シア。白竜の城が見えて来たよ」

その言葉に先に視線を走らす。

正面には月の光に照らされ、白とも琥珀ともつかない淡い輝きを放っている『白竜の城』が在った。

そこだけ夜の闇と隔離された様な、光に満ち溢れていた。

その訳は、城を築き上げている総ての石には、月煌石げつこうせきが用いられている為であった。月煌石は、月の光で輝くと言う性質がある。

その為、満月の夜はそこだけ不思議でいて、美しい別世界を演出しているのである。

「あれ？ 城の入り口に誰か立ってる」

「え？」

ラリスがそう言ったので目を凝らして見るが、私より先にラリスがその人物を認識した。

「シア、ラフェーサだよ！」

城の入り口の扉から二手に分かれ延びている、半円状の階段の一番下で彼女は立っていた。

「あら、本当……………」

きょとんとしている私に構わず、ラリスは馬を階段脇にある木の所まで誘導すると軽やかに馬から降り立つ。

そして、馬の手綱を木の幹に括り付けから、ラリスは私に向かって手を差し出す。

「シア、手を……………」

「うん……………」

私はその手に自分の手を乗せ、馬から身体を離す。

優しく抱き止める様に、ラリスが下に降り立つのを手伝ってくれ

る。

「ありがとう、ラス」

小さく笑みを零す私に、無言の微笑みで返してくれる。

私はラリスから視線を離して、ラフェーサへと移す。

すると、ラフェーサは恭しく頭を下げた。

「お待ちしておりました。シアーナ姫、ラリス王子」

「え？」

私とラリスは顔を見合わせる。

ラフェーサはきよとんとしている私達を促す様に階段を上がり、

龍の文様が描かれた扉を開けて言った。

「さあ、こちらへお入り下さい」

「……………行こうか、シア」

ラリスの言葉に頷いて階段を上がって行く。

ラリスは私の直ぐ後から来る。

「ねえ、ラフェーサ。私達を待っていたって、どういう事？」

白竜の城に入りつつ、不思議そうに訊く私にラフェーサはにっこ

りと微笑みを浮かべて答える。

「行けば解りますよ」

ラフェーサは静かに扉を閉めた。

「相変わらず、意味深な答えだな」

ラリスは小さく笑いを零して言う。

「もー、ラフェーサのいじわるっ！」

不貞腐れ気味に言う私を見て、ふふふと笑うラフェーサに。

「しかし、暫く会わない内にまた綺麗になったな。ラフェーサは」

ラリスはまじまじと、ラフェーサを見詰めつつ言った。

むう~~~~っ。ラリスってばっ！！ 私と言う者があり

ながら…………。

でも…………確かに、ラフェーサは綺麗だ。

さらりと膝辺りまでの長い漆黒の髪で、瞳は綺麗な淡いジェード・

グリーン。繊細な顔立ちの女性。

これは、普通の男性なら嫌でも見惚れてしまうだろう。

「……ラスのバカ……」

私はぼそつと呟く。

私だつて普通の女の子。好きな人に「綺麗だよ」って言われたいのが当たり前。

なのに、なのに。

その言葉は無情にも、ラフェーサに向けられた。

ちよつとは、私の事を気にしてくれたたつていいのに。

やっぱり、嫉妬心が芽生えてしまう。

「ふーん。ラリスもラフェーサの方が好みなんですわよね！」

ラリスを睨んで私が言うと、二人はギョツとした表情で私を見た。

「お、おい！ 何を言ってるんだ、シアー!!」

ラリスは驚きながら、私に言った。

「そうですね！ 馬鹿な考えはお止め下さい。シアーナ様、ラリス様は、運命付けられたお二人なのですよ。誰にもお二人の仲を邪魔する事など出来ません」

ラフェーサがはつきりと断言する。

「え？ ええ？」

あまりの断言振りに私は、ビックリした声を上げると、ラリスも少し困惑した顔で言う。

「ラフェーサ、それはちよつと大袈裟過ぎないか？」

ラフェーサはいつに無く真剣な眼差しで、私達に向かって言った。

「大袈裟では御座いません。シアーナ様は『白竜王』となられる御方。ラリス様もまた『炎竜王』の御名と力を継ぐ事を神託されたお一人なのですから」

「シアと僕が？」

「はい」

至つて平静に突拍子も無い事を、ラフェーサはラリスに答えた。

「ラフェーサ……白竜王と炎竜王って、このアトランティスに伝わる伝説の……？」

呆然としながら、私はラフェーサに訊く。

「その通りです。この大地に伝わる伝承には『五人の竜王揃いし時、時の門は開かれる。天から降り注がれる煌く光は、幾星霜の時間を超えて、祈りを現実のものとするであろう』と、そう伝承にはある。そして、それぞれの国に代々伝わっている伝承歌がある。しかし、それがどう言う意味を持つのか、はつきりとは解らないけれど、竜王の名と力を受け継ぐ者が何時の時代にも必ず現れている。私は十七代目の白竜の守人であると同時に、星宿を見、神託を伝える者。この度の神託で炎竜王と白竜王……いいえ、白竜姫を受け継ぐに相応しい御方々が、ラリス様とシアーナ様に決定致しました」

「少しか儀礼的な口調で、ラフェーサが私達に告げた。」

「だから、僕達がここへ来た時に待っていた、と言ったんだね」

ラリスの言葉に、ラフェーサは微笑を浮かべて頷く。

「シアーナ様には、これから白竜の神廟へ来て頂きたいのですが、宜しいでしょうか？」

「……良いけど、ラスも一緒でも良い？」

「ええ、勿論ですよ。もう一人の竜王になられる御方ですから問題御座いません」

その言葉に少し心細かったのが、瞬く間に消えていった。

このアトランティスでは、竜王の名を戴くと言つのはある意味王位に就く位に重大な事だった。

竜王の名を戴く者は、代々悪しき者を打ち滅ぼす力を持つと言われているからである。

だが、それが本当の事は、自分の目で見た事が無いから解らないのだけれど……。

「では、行きましょう」

ラフェーサに促されるままに、私とラリスは城の奥へと進んで行った。段々、その場所へ近付くにつれ、周りの空気が変化してゆくのが理解出来た。

邪気の無い、神聖な聖域だと言つ事を。

そして、私達は重そうな一つの扉の前に突き当たった。

扉は金と銀で翼を持つ竜の細工が施されており、左右に開く筈の扉の中心に丸く透明な水晶球が半分突き出た形で埋め込まれていた。ラフェーサは戸惑う事無く、その水晶球に右手を翳す。

「我、汝に仕える者なり。銀翼の輝きを持って招来せん。光を、今こそ我が前に……」

ラフェーサが呪文を唱えると、水晶球が銀色に輝き出した。パアアアッ……！！

一瞬、輝きが四散したかと思うと、水晶球が消滅して扉が吸い込まれる様に開いた。

眩しい位の光が目飛び込んでくる。

「う………わああ………！ きれーいっ………！！」

私は思わず、感嘆の声を上げる。

ラリスもまた、初めて見る光景に言葉を失っていた。

眼前に広がるのは……。

総ての壁が薄蒼い輝きを放つ水晶で出来ており、四方には放射状に伸びた子供の身長の高さ位の透き通る水晶の結晶体が置かれていた。

その真ん中には、曇り一つも無い水晶で出来た翼を持つ二匹の龍によって、護られる様に祭壇に置かれた、片手で余る程の大きさをした銀色に輝く球体があった。

「さあ、シアーナ様。ここから先は、貴方様しか入れない聖域です。私とラリス様はここで待っていますから、白竜の像が護る宝玉『白竜の泪』をお受け取り下さい」

優しく、穏やかに、微笑むラフェーサに私は少しだけ不安になって問い掛けた。

「ねえ、ラフェーサ？ 本当に私で良いの？ 間違いじゃないの？」

「私は嘘など言いません。シアーナ様が選ばれたのですから、自信を持って下さい。祭壇にある白竜の泪はシアーナ様を待っています

よ」

「うん……行って来るね」

私は頷いてラリスを見た。
こくり。

ラリスが小さく頷く。

言葉にはしてくれなかったけれど、私には聞えた。

大丈夫だよ、と。

私は正面を向き、足を踏み出して祭壇へと向かって歩き出す。

そして、実感していた。この白竜の神廟が、どれだけ神聖な場所かと言ふ事を……………。

雰囲気も、空間も、総て、次元の違う場所にここは在る。

あながち悪しき者を滅ぼすと、言つのは嘘では無い気がしてきた。
深呼吸して、私は宝玉の前に立った。

恐い位に自分の身体が緊張している事に気付く。

手が……………。

指先が、足が震えている。

「……………」

私は一度、目を閉じ、深く深呼吸してからゆっくりと息を吐き、
再び目を開けた。

両手を伸ばし、私は宝玉を手にする。

カツッ！！！！

「っ!?!?」

白い光が白竜の泪から溢れ出し、私を包んでいった。

暖かい光。

でも……………どこも無く、淋しい光。

光は私の身体を、心を、魂も総て包み込んでゆく……………。

真っ白な光が膨れ上がり、私を飲み込んだ。もう、それ以上、何も考える事が出来なかった。

そして……………。

総てはここから、運命の歯車が音を発して回り出したのだった。

キミノスベテハオレノモノ（前書き）

ノーマルラブラブか、キス止まりでしたが、やっときました。
BLえっちいシーンで御座います。

駄目な方はUターンして下さいませね。

キミノスベテハオレノモノ

「えっ？」

「ふわり。」

後ろから腕が伸びて来て、ローソファーに座っていた俺を優しく抱き締める。

「朝っぱらから何、呑んでくれてるんだよ？」

背後から掛かる声の主は、言わずと知れた忍であった。

「……あのさ、いきなりコレは無いんじゃないの？ 心臓に悪いぞ」俺は溜息を吐きつつ、忍の腕をぶにぶに突きながら言った。

「そうか？ 目が覚めて何故か部屋が、酒臭い方が驚くぞ」

そう言ってる割には、口調はあんまり気にしていない風でもあった。

「うるせえよ。いいだろ、飲みたかったんだから！」

冷たく俺は忍に向かって言うけれど、回された腕を解く事はしなかった。そのままの状態で、空になったグラスにウイスキー注ぐ直す。

俺がグラスに手を掛け様とすると、忍の手が俺の首筋から離れ、横からグラスをかつさらって行く。

「おいっ！？ 俺のグラスだろそれっ！」

忍は俺の言葉を無視し、グラスに口を付けてウイスキーを飲み干す。

「一気に飲むなよーおー！！」

「別に酒に弱い奴でも無いんだから、気にするなよ。海」にやりと、笑って忍は俺に言う。

「そうじゃなくて……そりゃあ、お前は上戸だし痛くも痒くも無いんだろぅが、ここに揃ってる酒全部、高い酒なんだから味わって飲めよ」

俺がそう言うと、忍はテーブルの上にグラスを置き。

「ふーん。じゃあ、味あわせて貰おうか」

平然とした顔で、俺に口付けをしてくる。

「んっ……」

俺は忍の口付けを黙って受け止める。

やがて、唇を忍は解放して小さく微笑む。

「な……何だよ？」

上目遣いに忍を見詰めて訊く。

こつこつ時の忍は、必ず何か良からぬ事を考えてる時が多いのだ。

「……いや、別に……ただ、お前って静かにしているとティアに似てるかなって、思ってた」

俺は怪訝そうに眉を寄せて忍に言う。

「何だよそれーえ！」

「こらこら、怒るなよ海。俺は、誉めてやってるんだぞ？ いつもは、本当にきつい表情してるが、笑った所なんか可愛い顔してるぞ」

「えっ!?!」

一瞬、俺の時間が停止した。

「え？ えええっ!?!」

俺は自分の顔が火照るのを感じながら、あたふたしてしまった。

忍は楽しそうに、クスクス笑いながら俺を見詰める。

その笑みが、俺をどんどん深みへと誘い込む。

「う~~~~っ。笑うなあーっ!?!」

滅茶苦茶恥ずかしくて、いつもなら大声出して叫んでいるのだが、今日はちよつと違っていた。

余りにも自分が恥ずかし過ぎて、そのくせ忍の笑顔が綺麗過ぎて俺を惹き付けてしまう。

本当に楽しそうに笑う忍なんて滅多に見られるものじゃない。普通の少年の笑顔なんて見れない。大人の表情ばかりで……いっつも、どこか余裕のある笑みをしてるから。

「海……」

「えっ？」

忍は不意に、いつもの余裕の有る表情に一転する。

「お前って、本当に可愛いよ。シアーナは無邪気さと、子供っぽさが有ったけど、今のお前はある面ではヒネてて、素直じゃない所がそそられるんだよな。月の光を浴びてシアになるけど、そっちはどことなく大人っぽいし……俺はこっちの方が好きだな」

忍は俺の頬に触れ、にっこりと微笑む。

俺は絶句するしか無かった。

そ……そそられる？ そそられるって……？

どういう意味だツ！？

「こら海！ 何放心してるんだよ？」

ぺちん。

忍の右手が俺の左頬を優しく叩く。

「なっ……何だよ、そのそそられるって言うのは！」

恐々と言う俺に、忍はおや？ と言う様な顔をした。

「そのまんまの意味なんだが……そうだなあ、言い方を変えると、無抵抗な人間を襲っても面白くないだろ？ 少しは抵抗してくれなきゃ襲い甲斐が無いと言うものだろう？ そっちの方が苛め甲斐が有って良いし」

ニヤニヤ笑って恐い事を言う。

いや、それ以上に、忍の笑いの方が恐い。

「……サディスト……」

俺はこの時、思いつきり危険を感じていた。

絶対ヤバイ！ ここから逃げなきゃ何をされるか。

「なあ、海。たまには趣向を凝らしてするのも良いと思わないか？」
にやり。

その場から逃げようとした俺だったが、極上の悪魔の微笑みが俺をその場に硬直させてしまう。

「しゅ……趣向って何だよっ？」

止せばいいのに、いつものクセで突っ込みを入れてしまう。
それでも、心なしか声は上擦っていた。

「……これ、なーんだ？」

忍は何所からとも無く出した、短冊の形をした紙を二枚俺に見せる。ぴらぴらとした和紙の様な紙には、のたくった文字が中央に描かれていた。

見た事があるその紙は、陰陽道に用いられる呪符と言うヤツではないか。

「呪符だろ？」

「当たり前。さて、これの使い方だが、これの応用は幾らでも有る」「応用？」

怪訝そうに言う俺を、忍は穏やかに見詰めつつ言葉を発した。

「オン・テイハ・ヤクシャ・バンダ・バンダ・ハ・ハ・ハ・ソワカ」

忍の言葉に呪符は、二匹の炎蛇の様に変化し呆然と見る俺の両手首に絡み付く。

「げっ!？」

抵抗する間も無く、それは俺の頭上辺りに両腕を持って行くと、何も無い空間に固定したのだった。

「例えば、人を縛るとか」

呆気にと取られている俺を尻目に掛けながら、冷静に説明をする。

「あのなー。やってから説明すんじゃねえよ!」

じとじととした目で、俺は忍に言った。

「だってお前、言うのと逃げるじゃないか」

あつさりと答える忍だったが、反省の色は微塵も無い。

「当たり前前だ! 冗談じゃねえぞ、さっさと解きやがれっ!」

じたばたする俺を見て、忍はクスクス笑いを零した。

「折角、拘束したのに態々、解く奴はいないと思うよ。海」

「ちょ……ちよっと、冗談は止めようぜ……」

逃げ腰な俺の耳元に、そっと忍は唇を寄せて囁く。

「冗談かどうかは、その身で確かめろよ」

ゾクゾクゾク……。

俺の背中を寒気が、一気に駆け上がって行く。

助けてくれー！ーッ！ー！！

心の中で叫ぶが、その願いはどうやっても叶う事が無い。

「んっ……！！」

俺の耳朶を噛んでから、忍は首筋に舌を這わせてゆく。

俺はぎゅっと、きつく目を閉じて自由にならない手を歯痒く感じている。

忍の大馬鹿ヤロ~~~~ッ！！

「~~~~ッ！」

忍の手がシャツボタンを外し、中に滑り込んで素肌に触れてくる俺は強く強く拳を握って、顔を背けた。

「海……」

嘔きと共に、忍の左手が俺に頬に触れる。

「やめて……っ」

上擦った声で俺は忍に懇願するが、忍はクスリと笑っただけだった。

それは、否定の笑い。

「冗談だけにしてくれよっ！俺、さっきシャワー浴びたばっかなんだから……」

「……そうか。だから、石鹸の匂いがするのさ。でも、知ってるか？そういう匂いってのは、欲情するもんなんだぜ？」

忍はそう言うと、俺の唇にキスを降らせた。

「……」

俺は目を開けて忍を見遣った。すると、優しく微笑みを見せる。けど、ここで大人しく屈してしまっただけは、忍の思う壺である。

「やっぱり嫌だ！解けたら、解けよッ！！」

足をバタバタさせて抵抗を試みる。

「嫌だと言われて、俺が素直に従う奴に見えるか？それに、言う事を聞かせてみせるのも、また一興だしな」

にや。

口元に笑いを浮かべながら、俺を組み敷いてズボンのボタンを外しに掛かる。

「ちよ、おい、こら！ ドコ触ってんだよっ！」

騒ぐ俺を無視し、忍はジツパーを下ろして中に手を滑り込ませる。

「……っん！」

ビクン！

一瞬、身体が跳ねる。

「海」

「う〜ん」

くぐもった声音を上げ、俺は忍を見る。

そんな俺を満足そうな笑みで見ると、俺の唇に自分に唇をゆっくりと合わせる。

深い深いキス。

「あ……んっ」

絡んでくる忍の舌と忍に触れられている、そこが熱くなっているのが理解出来た。

だけど、理性ではこんな事はイケナイと解ってる。

しかも、今は早朝だ。

こんな所を雷やティアに見られでもしたら……と、考えると気が気ではない。翔は絶対爆睡中だろうから、心配は全く無いが。

「へえ……何時に無く緊張してるな……心配か？」

俺がじっと耐えている理由を解っていて、せせら笑う忍を睨み付ける。

「解ってるなら、最初から……するなよっ！」

「安心して声を出しても良いぞ」

悪魔の囁きが降ってくる。

「ふざけんじゃ……ね……えっ！」

ビクン！

俺の身体が震えて反応する。

忍に触られる度に、熱くなるそこを全身で感じ取ってしまった。
「大丈夫だよ」

囁かれる声に蕩けそうになる自分を押さえつつ、忍に悪態を吐く。
「……どこが、大丈夫なん……だ、よお……」

俺は淫らに動く、忍の指の感覚を堪えながら声を上げた。

「全部だよ。予め結界を張っておいたから、こっちの声は何一つ聞えない。誰かに助けを求める事も、この部屋から逃げる事も出来ないんだよ。海……」

不敵な微笑を浮かべると、忍は俺のズボンと下着を一気に脱がす。そして、忍の囁きが降ってくる。

「逃げたい？」

「ん……っ……逃げるワケねえ、だろ！ どうせ……逃げられないんだし……」

結局、俺って素直じゃない。

なんだかんだ言っても、忍の側に居たいのに……ヒネた言い方が出来ない。

抱かれるのは嫌いじゃない。

むしろ抱かれない。

肌で。

全身であいつを感じたい。

だけど、つい憎まれ口を利いてしまう。

俺って、天邪鬼。

「本当、素直じゃない。あんまり素直じゃないと、泣かせてみたくなる」

クスクス笑って、そう囁く声と、巧みな動きをする指が、俺を高めへと追い遣る。

「や……あっ」

「海……愛してるよ」

「……忍っ」

告白と共に降り注いでくる口付けを受けながら、俺は忍に総てを

委ねる様に瞳をゆっくり閉じた。

「海」

忍が俺を呼ぶ声。もっと、俺を呼んで……。

俺だけを見詰めて。

俺がここに存在するのは、ラスが……忍がいるから。

「忍……っ」

狂おしい程の快樂の波が、押し寄せてくる。

「どうした？」

「も、ダメ……だよ……」

半分混乱した思考で、俺は忍に告げた。

「何が？」

冷やかな口調で、忍は俺に訊く。

「あ……っ……いじわ……るっ！」

涙声でしか言う事が出来ない、自分が情けなく思える。

「言わないといつまでたつてもこのままだぞ？ ほら、言えよ」

忍は昂ぶった俺自身を、優しく、でも少しだけ強く扱き始める。

「っ……ん、やあ……っ！」

堪らず、首を左右に振って喘ぐ。

「いつ……イかせて……え」

荒い呼吸の中で、俺は快樂を求め始めていた。

欲しい。

身体と頭の中を支配するのは、快樂と言う名の欲望であった。

「し……のぶ……」

「大丈夫……これから、死ぬ程イイ思いをさせてやるから安心しろ」

忍は身体をずらし、熱く火照った俺自身に舌を這わせるとゆっく

りと口で啜える。

「ああっ！」

両手は縛られたままの状態で、腰が浮き、身体が弓なりにしなる。

全身で忍の行為を受け止める。

「もう……イク……っ！」

ビクン！ ビクン！！

と、二度電気が走った様に、身体が震えて俺は、忍の口内に熱いモノを吐き出していた。

ペロりと、忍は自分の右手の人差し指と中指を舐めながら、満足気に微笑する。

「んー……？」

頭の中が真っ白になってぼんやりする俺の腰を忍は膝の上に乗せると、濡れた中指を秘部にゆっくりと中へ進入して来る。

「あっ！ んんーっ！」

反射的に身を擦って逃れようとするが、忍は無理やりに二本目の杭を入れる。

「ああっ！」

意に反して仰け反る俺の身体を固定する様に、忍は左手で腰を押さえ付けた。

「うあ……やっ……」

中で蠢く指の動きが、俺を翻弄していく。

ザワザワとした寒気のがんが、ゾクゾクとした快感に摩り替わっていく。

それを察してか、三本目の指が捻り込まれる。

「は……う……んっっ」

びくん！

身体が大きく震える。

快樂の細波が寄せては、引いてゆく。

どうにもならない位に身体の炎は、止められない程に暴走をし始めていた。

「や……っん」

「海……」

忍は身体をずらし、俺の耳元に唇を近づけ囁いた。

「あんっ……」

知らず知らずの内に、口から甘い声が漏れ出す。

もっ、どうなってもいい。

メチャクチャになる位、愛して欲しい。

身体が求める。

歯止めなんか利かない。

「しのっ……はや……くっ……」

高みへと昇り詰めようとする俺を制する為に忍は、ずるんつと勢い良く指を引き抜いた。

「ああっ！ やだっ……あ！！」

上擦った声で言う俺に、忍は冷酷に質問した。

「なにがヤダ？」

「……抜かないで……くれよ……」

荒い息を吐きながら、俺は潤んだ瞳で忍に懇願していた。

「それだけ？」

「いじわる……しないで、抱いて……」

「いい子だ」

耳に掛かる熱い囁きが、俺を狂わせる。

「あ……んっ」

忍は己いきり立ったシンボルを、俺の秘所に戸惑う事無く入れて行く。

「いつ……や、痛い……っ！！」

下腹部に掛かる圧迫感の為、滲んだ涙が雫となって零れ落ちた。

「愛しているよ」

忍の囁きが、苦しさを、愛しさと、切なさに変えていく。

「あ……んんっ」

忍の総てを啜え込んだ俺には、最初から自由なんか無い。

解かれていないその両腕は、悲しい位に無力感を味わっていた。重なり合う肌は温かく。

けれど、しがみ付く事は許されない。

それが俺を苦しめる。

素直になれなかったから……。

罰なのかもしれないけれど 触れたい。

忍の髪に。

頬に。

背中に……。

「解いて……嫌だよ……こんな、の……イヤだ」

堰を切った様に、俺の両目から涙が溢れる。

「……海っ!？」

びっくりしたらしく、目を見開いて忍が俺を見た。

「やっ……いやぁ……だ……ぁ」

嗚咽を漏らす俺の髪を優しく撫でながら、忍はキスをしてくれる。

突然。

フツ……と、手に掛かる力が無くなる。

俺の両腕が呪縛から解き放れ、自由になったのである。

「ん……んん」

俺は口付けを受けながら、忍の髪に触れ、指を絡めた。

確かに、そこにある。

掴める総てが。

自分の欲している、確かなるものが……。

「愛してる」

「……あ……はぁっ」

嵐のような激しいリズムが、淫らに喘ぐ声を俺から引き出していく。

「愛しているよ、海」

「いや……ぁ……」

俺は貪り付く様に、忍の右肩に顔を押し付けて縋り付いていた。

「あぁっ つ……!」

蕩ける様な快樂に、身を委ねて。

激しく、忍を求めた……。

ほんわかロンビ？

キッチンから良い香りが広がって来る。

「おはよー」

ちよつと気の抜けた声を上げながら、朝食を作っている雷に声を掛けて、ダイニングキッチンのカウンター席に座る。

「あ、海。おはよう」

雷はにこやかに返してくれた。

「……なあ、今日は何を作ったんだ？」

俺の問い掛けに、雷は爽やかに答える。

「今日は和食だよ。最近、洋食ばかりだったからね。あ、そうだ。海の好きな茶碗蒸しも作っておいたからね」

「……サンキュ」

「いえいえ、翔も好きな物だしね」

さり気無く翔の好きな物と、付け加えるあたりが抜け目無い。

まあ、仕方ないか。

雷の翔に対する甘やかしは、今に始まった事ではない。その逆に、翔は雷に対して、メチャクチャ甘ったれである。

そして、その翔が見えないので訊くと。

「んで、翔は？」

「まだ寝てるよ」

と、きたもんだ。

「甘やかし過ぎじゃねえんかーあ？」

「良いんだよ。翔にはあのままできて欲しいからね。でないと僕は、翔に何もしてあげられないからさ」

ふふふ……と、楽しそうに雷は言う。

はいはい、そーですか。

呆れ返りつつ、笑みを浮かべる雷を見詰めた。

「それに……変わってしまったら、寂しいしね。まだ、僕だけの翔でいて欲しいから」

楽しそうに微笑みつつ、とんでもない事を口にする。

「それって……聞き様によっては危ねー発言だぞ。雷」
ぎよっとしている俺に。

「危ない発言に取っても良いよ」

そう言うのと、クスクス笑い出した。

「……………」

俺はそれ以上、突っ込みを入れられなかった。

「で、海の方はどうなの？」

調理された物を皿に盛り付けながら、手を休めようとはせず、雷が訊いてくる。

「へ？」

「へ？ じゃなくて、忍とは上手くいつてるの？」

「う、上手くって……」

どうやら、俺にお鉢が回って来たらしい。

なんでそうなるかなあー。

「ほら、海って意固地になってしまっ所があるでしょ？ 翔みたい
に甘えるの下手みたいだしね」

「どっという意味だよ！」

ちよっとムツとなって言う俺に、雷はあっさりと答えた。

「そういう意味。まあ、あんまり忍を刺激しない方が身の為だよ。
忍って結構、サドっ気が有るから気を付けておいた方がいいよ」

グサツ！！！！

雷の台詞は思いつきり突き刺さって来る。

そりゃあもう、先程嫌と言うほど身に染みましましたよッ！！
！！。

と、叫びたい気持ちをぐっと堪えて。

「うーん。確かに、ラリスとは天と地位の差があるよな。ラリスは
とことん優しかったっけ……。あいつは、どこか策略家っぽいよな」

「そうそう！ たまに翔なんて、イジメられたーッ！ って泣き付いて来たりするしね」

雷は思い出した様に俺に告げる。

忍が忙しい時に、翔は何かと邪魔をしたりする。多分、その報復措置で、イジメられたのだろうと察しがつく。

確かに俺も時々、翔の能天気さにむかつかつく事があるのだ。

それって、自業自得だぞ……。忍の邪魔をしたらどうなるか位、解りそうなものだろうが。

ははは……。と、俺は乾いた笑いをする。

「でも、そのお陰で、翔が僕を頼ってくれるから良いんだけどね」
にこやかに俺に告げる雷は、なんだか嬉しそうであった。

「甘えん坊だからな、翔は」

「海も翔とまではいなくても、少しは忍に頼っても良いんじゃない？」

「……さあな。時と場合によるよ」

俺の言葉に、雷は首を少し傾げて。

「ふうん……。でもね、海。好きな人に頼られるのって、嬉しいものなんだよ」

そう言っつて、雷はにつこりと微笑む。

せ……。説得力ある微笑みだよな。流石、忍と同等なだけはあるぜ。

俺は雷に対して、忍が一目置いている事を知っている。ある意味では、雷と言う人物は忍より上をいくのかもしれない。

俺、絶対に雷は敵に回さないぞ！

と、心に固く誓うのだった。

お届けもの

俺達はリビングでだらだらと、午後の一時を満喫していた。

まあ、それぞれ好きな事をしているだけだが。

翔はTVに向かって叫びつつ、シューティングゲームに熱中している。忍はソファアームに座って優雅に読書。しかも、その姿がやたら絵になるときてる。

俺はと言うと、ソファアームにごろんと寝転がって、何もしないでただぼーっと二人を眺めていた。

この場に居ない雷とティアは、晩御飯の買出しに出ている。

「うぎゃ〜〜〜〜ッ！　また、やられたぁーッ！！」
翔が叫ぶ。

よっぽど良い所まで進んでいたのであろう、思いっきり悔しがっている。

「あと一ステージでクリアだったのにいい！」

「じゃあ、コンテニューすれば？」

俺がすかさず言うと、こちらを向いて。

「だってえー、ノーコンテニューでクリアだとエンディングが違うんだもん！！」

ぶう、と頬を膨らませて翔は言った。ちょっと涙目になっているあたりが、少し可愛らしい。

何と無く、雷が構いたくなる気持ちが解かる。

ピンポーーーーンッ

と、玄関の呼び鈴が室内に響いた。

「誰か来たみたいだな」

忍が本から目を離し、俺を見て言う。

「オレ行かないから、忍が行って来て」

そう言うのと、翔はTVに向き直り再チャレンジを始めた。

「……つたく、仕様がないな」

忍は溜息混じりに言い、本を閉じてから立ち上がる。行き掛けに忍は、フワリ……と俺の頭を撫でて行った。

数分後。

忍は驚くべき人物を家に招き入れたのだった。

「海……」

「あ？ 遅かったじゃねーか。変な勧誘だったんか？」

俺はリビングの入口から掛かる忍の声に耳を傾けながら、目まぐるしく変化するTV画面を見詰めていた。

「海、お前に懐かしい人が逢いに来てるぞ」

「え？」

俺はその言葉に振り返って、忍の方を見た。

すると、そこには可憐な感じの服装を着た、小さな少女が立っている。齢5〜7歳位の小学生であろうと分かる女の子が、ニツコリとこちらに笑い掛けた。

「……？」

俺は、一瞬言葉を失ってしまう。

「誰？」

見知らぬ女の子を俺は、怪訝そうに見遣った。

翔は俺達の会話など耳にも入って無く、夢中になってゲームに燃えている。

サラサラの金髪と、青い瞳をした少女は俺に向かって言った。

「お久しぶりです。シアーナ様」と。

俺はその少女の一言で、絶句状態に陥った。

更に少女は続け様に、こう言ったのである。

「思いつきり姿は変わってしまいました……シアーナ様がお忘れ無ければ良いのですが……私の昔の名は、ラフェーサ・リーズです。覚えておいでですか？」

小学生にしてはとても達者で、優雅な口調の少女。

ラフェーサ？ ラフェーサ・リーズ？ あのラフェーサ！
？ 言われてみれば、どこと無く物腰の穏やかさといい、口調もラ
フェーサそっくりだ。

俺は目を丸くしながらも、冷静に判断しようと試みた。

「ほ……ほんとに、ラフェーサなのか？ 嘘じゃないよな？」

「ええ。本当ですよ、シアーナ姫。先程、ラリス王子にもそう言わ
れましたけど……」

笑顔と一緒にくすくすと、少女は楽しそうな笑いを零す。

「あ、そうでしたわ。今の私の名は『リズ・スペンサー』と、申し
ます。リズとお呼び下さい。」

リズはそう言うってから、はたと気が付いた様な顔をして。

「今のお二人の名は、光月海様と火鷹忍様でしたね」

と、一言付け加えるのだった。

「……でも、どうしてここが判ったんだ？」

俺はソファからよろよろと歩き、入り口の方へ移動しながら訊
いた。

「私は今でも、星を……未来を見る事が出来るのです。それ以上に、
私はアトランティスの崩壊から、永遠と思われる程の永い時代を、
記憶をそのまま持ち、転生を繰り返して生きてきました。そして、
今日これで、その役目も終わる事が出来ます」

俺の問い掛けにリズは、涼やかな表情で言う。

「どう言う事だ？」

訝しそくに忍が、リズに向かって言った。

「私が記憶を持ちながら転生を繰り返してきたのには、重大な二つ
理由が在ったのです。一つ目は……『シアーナ様』がアトランティ
スで受け継いだ『白竜の泪』は他にも存在し、シアーナ様が持って
いるのはコアの部分であり、他に在るのは『泪の欠片』と言われて
います。それらが総て集まり、本当の『白竜の泪』と成ります。そ
れを伝える事。二つ目は、その総てを揃える時を監視し、見極め導
く事……そして、これが私が持つ、最後の『泪の欠片』です……」

真剣な眼差しで、リズは喋る。

「ちよつと待て！ 最後の一個ってどう言う事だよ？」

俺はリズの言葉に疑問を抱き、リズが話し続けようとするのを遮った。リズは顔色を変えず、穏やかに返答する。

「それは、これからお話します。泪の欠片はある人物が集めていきます。そして、今宵……彼はここに来ます。総ての『泪の欠片』を探し出して……」

「……彼？」

一瞬、俺の脳裏を掠める人物がいた。

でも……そいつは……。

そんな筈は無い！ と、思いたい。

「彼って……？」

忍の不思議そうな問い掛けに、リズは少しだけ瞼を伏せ、意を決した様に俺達に告げる。

「彼の名は……黒羽龍斗。生まれる前から内に秘めたる名を黒竜王『ダーク・ブラッド』と言う。そして……前世では、バルド・ブラッド・ダークと名乗っていました」

「なッ！！」

忍の表情が、数十秒間だったが凍り付いたのが分かった。

「……」

でも、俺は……何と無く解っていた。ただ、信じたく無かっただけなのだ。

何も言えず、俯くしか出来なかった俺を心配そうにリズが見上げていた。

「……申し訳ありません。でも、仕方が無いのです。私は、この日をずっとずっと待っていました。永遠とも思われる時の中で……白竜の城の守人として、最後の『泪の欠片』をシアーナ様に渡す事と、重大な事実を伝える事を課せられていました」

「……事実？」

俺は小さく呟く。

「はい。アトランティスは、今も存在しています。海の底で……。あの崩壊の時、大陸を支える宝玉が自衛システムを発動したのです。しかし、宝玉の力は不完全で……大陸から脱出した我々の目の前で沈んで行きました。しかし、アトランティスの真鍮に位置する場所は、今でも白竜の名を持つ者を待っています」

「待っている？」

「はい」

リズは頷いて、首から下げたネックレスを取り出す。つゆ型をしたアクアマリンの様な石のペンダントトップだったが、宝石特有の輝きが無い。

一見すれば、ただの薄青い石としか見えない。だが、その石は理解出来る者が見れば、明らかに違う事が解った。

目に見える輝きは皆無なのだが、力の波動が確實そこには在った。

「その石は……？」

俺は食い入る様に、その石を凝視していた。引き寄せられる『力』が、その石にはある。

リズはネックレスを持ち上げて。

「これが最後の一つ『泪の欠片』です。これは、海様……貴方に俺にリズはそれを差し出した。

引き寄せられるまま、俺は手を出して受け取った。

優しくリズは微笑んだ。

それは……願い、祈り、希望を託す様な微笑みだった。

「そして……」

リズは右の掌を広げ、瞼を閉じる。

七色の光がリズの掌に集中していく。

輝きが形取られ、そこに六角ミックスカット型のサファイアの様な淡蒼色の結晶石が現れる。

大きさは十センチ位で、幅は五センチ程であった。

丁寧にカットされた凸面はまるで、変形した十二面体のサイコロの様である。

「これは、忍様に……儀式の際、必要になる『鍵』です」
リズは忍に『鍵』を手渡す。

「この使い方は？」
忍は渡された『鍵』をまじまじと見詰め、リズに問い掛けた。
リズは忍から視線を俺に移す。

「……？」

俺はきよんととして、自分を指してリズを見る。

こくりと、頷いてリズが語り始める。

「その使い方は『シアーナ様』が知っております。けれど、今の海様では使い方が解りません。総ての『白竜の泪』が一つに成った時、自ずと『鍵』の使い方が解るでしょう」

「ちよつと待つてくれよ。さつき、黒竜王が泪の欠片を持って来るつて言つたよな？ それと関係があるのか？」

俺の言葉にリズは肯定する。

「はい。彼はアトランティスの『黒竜王』ではなく、黒羽龍斗としてここに現れます。ですが、彼にはあの時の様な邪気は無いでしょう。以前……私の前に一度彼は現れました。アトランティスを滅ぼしたとは思えない位の優しい気を持って……彼は、私を尋ねてきました。私が星を見る能力が有るのを知つてやつて来たのです。

「黒竜王は、一体何を尋ねたんだ？」

「自分の大切な人を、どうすれば闇よりも深い淵から救えるのかと」
「大切な人？」

怪訝そうに忍が眉を寄せ呟く。

「黒竜王の言う大切な人とは……『白竜王ラティナ』その人です。彼女を救う為に、泪の欠片を集めて今夜お二人の前に現れます。でも、彼は争う気など無いでしょう。ただ彼女を助きたい一心でやってきます。ですから、お願いです……どうか『黒竜王』の願いを叶えて下さい。それが『白竜王』の願いでもあるのです。今のお二人と周りには、それを可能にする『力』が在ります」

切々と綴るリズの言葉には、一片の嘘など無かった。

あるのは、真実だけ……。

忍はしゃがみ込んで、リズに告げた。

「解ったよ」

その言葉を聞いて、泣き出しそうに顔をしかめ、でもとても嬉しそうにリズは笑顔を浮かべた。

「有難うございます……私には、これ以上何も出来ませんが、忍様と海様には幸せになっていただきたいのです。お二人の友人として私は願っています」

「大丈夫だよ、幸せになるから」

自信有り気に忍が宣言する。

「……………」

俺はその台詞に顔が赤くなる思いをしながら、明後日の方へ向いていた。

んな、宣言しなくたっていいだろーがッ！ 恥ずかしいぞ、

馬鹿野郎っ。

「海様……………」

「えっ!?!」

いきなり掛かるリズの声に、俺は我に返った。

「なっ、何?」

「私の役目はもう終わりです。これで、私は帰ります。でも……………これだけは忘れないで下さい。黒竜王と白竜王を救えるのは、貴方方だけだと言っ事を……………」

リズはそれを俺達に告げると、帰って行った。

双子

暁の空を夜の闇が侵食してゆく……。

黒竜王が来る。白竜の泪を求めて……。

俺は部屋の灯りを点けずに、紫色に染まる空を見詰めていた。不思議な事に、黒竜王が来ると解っているのにも関わらず、何故か恐怖感は無かった。むしろその日を待っていた様にすら思えてくる。

でも、なんでだ？

コンコンコン。

部屋のドアが叩かれた。

カチャ……。

ゆっくりとドアが開いて、中に入って来たのはティアだった。

「……ティア？」

振り向いた俺にニコツと微笑みを浮かべ、こちらに近寄って来る。

「お兄様、心配いりませんわ」

「え？」

唐突に告げられたので、面食らってティアを見ていると。

「これから起こる事は、私も関わる事。大丈夫よ、お兄様はもう昔の様に一人で解決しようなんて思わなくても良いの。私にも責任位はちゃんととらせて下さい。その為に、私は居るのだから……ね」

ティアの笑顔には、決意が浮かんでいた。

「ティア……もしかして、記憶が……？」

「ええ。思い出しちゃったの……本当は、お母様が思い出させてくれたの。私には大切な役目があるから……。シアーナお姉様が、命をかけて私を『パール』を救ってくれた。だから、今の私が居る」
にこやかに振舞うティアに、俺はビククリしながら訊く。

「じゃあ、今日、精霊界に行ったのは……」

「ええ、お母様はみんな知っていたわ。うっん、お母様だけじゃない。精霊王様も……だから、私にも手伝わせて下さいね」

「ああ。分かった」

ティアの決意は、はっきりしていた。だから、俺は頷いて応じた。そう……アトランティスの様に悪い結果にならないという、確信が有ったから。

「じゃあ、お兄様。夕飯を食べましょうよ。ほら、腹が減っては戦が出来ぬ……って言うでしょ？」

「ああ」

俺はティアを強いなあ……と思った。

前世を思い出しても、それを良い方向に持って行くこととする強さをティアは持っていた。

俺が考えていたよりも、ずっとずっとティアは強い。

あの時の『シアーナ』の……俺の選択は、間違っていないかなったんだ。

その時は幸せになれなくても、次に幸せになれれば良いんだと……

…。

「お兄様は、今……幸せですか？」

少し心配そうに、俺に問い掛けてくるティア。

「え？」

俺は驚きながらも。

「うん……幸せだよ」

自然と笑顔になって、答えていた。

脳裏に浮かぶ、忍の微笑み。

ああ、そうだ。

忍と一緒に居られる事も……。

ティアや翔や雷と、一緒に笑い合える事も。

今の俺には、大切な宝物……。

幸せになれる宝石なんだ。

「良かった。ね、お兄様、私も凄く幸せですからね」

うふふ……と、笑いを零してティアは言う。

俺は何だかとても嬉しかった。

凄く。

凄く……。

満月

窓の外に広がる闇の中に、一人の少年が立っていた。
縛った後ろ髪が満月の下で、風に揺らめきながら靡いている。

「あっ！」

窓に目を向けていた、翔が声を発した。

同じリビング内に居た俺達は、一斉に翔を見た。

忍も、ティアも、雷も……そして俺も。

「誰か外に居るよ」

全員、窓際まで走り込む。

そして、外の庭を食い入る様に凝視した。

庭に居る一人の少年は、右手に西陣織の細長い筒状になった袋を
持っていた。

「……………」

そんな中、忍が真っ先に行動していた。

ガラツ。

窓を開け、外に飛び出して眼前にいる少年に向かって言う。

「お前が、黒竜王か？」

少年は穏やかに笑い、口を開いた。

「ああ。懐かしいな、その名は。でも、今の俺の名は黒羽龍斗って
言うんだ」

悪意など皆無な瞳で、龍斗と名乗る少年は俺達を見詰めている。

「お前達に会えば、ラティナを蘇させられると聞いて、ここまで来
た。不躰だけど、お願いだ。彼女を助けてくれ！」

必死な表情で、龍斗は俺達に訴える。

その表情に俺は、どこか惹かれるものがあつた。

ああ、そうだ……。シアーナだった頃の俺と同じだ。

ラスを助けたくて、黒竜王に訴えたんだ。大切な人を、愛する人

を守りたい、助けたい……自分もそう思っていたっけ。

目の前に居る龍斗と、シアーナがだぶる。

この切ない想いは、俺にも判る。

「ここに……白竜の泪の欠片がある。彼女のバラバラになっていた、魂魄を総て集めた。これで、ラティナを復活させる為の『欠片』が揃った筈だ。だから、頼む！ ラティナを救ってくれ！！」

「皆、そこを退いてくれ」

俺は満月の光が当たらない様に一番後ろにいたが、外に出る事を決めて皆に声を掛けた。

「お兄様……今、外に出たら姿が……」

心配そうにティアが、俺に言ってくる。

「いいんだよ。だから、外に出させてくれ」

俺の言葉に、渋々と皆が退いてくれる。

「海……」

振り返り、俺を真剣に見詰める忍が目の前に居る。

俺は精一杯の笑みを見せて。

フワツ……。

重力に逆らい、飛ぶ。

窓から飛翔すると、忍の頭上を飛び越える。

そして。

パアアアアツッ！！！！

琥珀色の月の輝きを全身に浴び、俺の姿が変化してゆく。

男から女へと。

月の輝きで井天藍色になった長い髪が、波の様に風に靡く。

「海っ！！」

忍が龍斗の前にいる、俺を呼んだ。

その声にくるりと向き、ふわっ……と俺は飛んで忍の首筋に抱き付く様に、でも柔らかく腕を絡める。

「心配いらない」

「……海」

忍の首筋に、顔を埋めながら俺は囁く。

「俺を信じるよ、大丈夫」

「分かった」

「サンキュ。好きだぜ、忍」

サラリと言った筈だけど、やっぱりちょっと照れちゃって、さっさと絡ませた腕を解く。

「海!!」

グイッ!

解いた俺の左手首を、忍が力尽くで引っ張る。

「うわッ!?!」

重力の影響を受けない俺は、簡単に忍に引き寄せられ唇を奪われた。

「っ!?!」

ビククリして目を白黒させている俺などお構い無しに、忍は唇を離すと微笑んで囁く。

「愛しているよ」

「~~~~~っ!!」

「こっついう場合って、俺が誘った事になるのか？」

複雑な心境なので、言い返す事が出来ない俺だった。

「ふう……」

溜息を小さく吐いて龍斗の方へ振り返り、藍色のシャツの胸ポケットから『泪の欠片』を取り出す。

「これが、最後の泪の欠片……これをどう使うんだ？」

俺は龍斗に問い掛けた。

すると、龍斗の右の掌から琥珀色の十センチ位の珠玉が現れる。

ポオッ……。

龍斗の持つ珠玉が白く光る。

ポオオオオオッ……。

「……?」

俺の持っていたつゆ型の石も、蒼く蒼く光り始めた。

「えっ!？」

青く輝く石が、勝手に俺の手から放れる。

龍斗の持つ泪の欠片も同じ様に手から放れ、頭上へと上っていく。満月の輝きを受ける様に、月の中心辺りで『欠片』は止まる。

スウツ……と、二つの石が融けて一つに成った。

真っ白な雪の様な、珠玉になつて……。

珠玉はふわふわと、俺の側へ降りて来る。

龍斗は願いのこもった瞳で、珠玉を見詰めていた。

そして、俺の目の前で珠玉が止まる。

「……………」

俺はゆっくり瞼を閉じながら、深く息を吐いた。

俺には判っていたんだ。たぶん、もう、ずっと前から白竜

の泪を受け入れる事を。

珠玉が近付いて来るのを感じる。

俺の胸に吸い込まれていくのが解る。

「……………」

身体が……胸の奥底から、温かい光が満ちる。

溢れ出す。

俺は瞼を開けて、天を見る。

何故か、月が歪んで遠ざかっていく……。

あれ? なんてだろ……?

「海 ツ!!」

忍の驚いた声が、遠くで聞こえる。

変なの……腕が締め付けられるみたい。

でも、何だか、忍の腕に抱かれているみたいだ……。

遠き日の思い出

「雪だ……」

ふわふわと、落ちて来る雪。

俺は手を伸ばし、雪を掌の上に乗せようとする。

「え!?!」

雪は俺の手をすり抜けて、庭の地面に落ちたのだ。

「どうなって」

「なあ、忍」

「え?」

その声に俺は、ギョツとなって振り返る。

目の飛び込んだのは……シャンパンを片手に『俺』が、忍に話し掛けているという光景だった。

「ん?」

「何でさ、お前……俺とクリスマススイブと一緒に過ごそうなんて思っただんだ? お前なら可愛い子も、綺麗な女も選り取りみどりだったのに。うちのクラスの女子も、お前に告白した奴が結構多かったって聞いてるぞ? しかし……何で断っただよ、勿体ねーじゃねえか」

性格良くなって、可愛い子だったのになあ……と、ぶつぶつ『俺』が小声で言っている。

忍は小さく笑って。

「本命じゃないから、傍に居ても嬉しくも何ともない。むしろ鬱陶しい位だ」

そう答える姿だった。

これ……は? そうだ!! 俺の十六歳の誕生日前夜、クリスマススイブにあった事だ。あの時は、翔と雷が実家に帰省していて、ティアは『巫女』としての仕事の報告を兼ねて帰ってしまっ

いて……俺と忍の二人きりで留守番をしていたっけ。

部屋には大きなクリスマスツリーを中央の壁際に置いて、客間のテーブルの上には、忍が買い込んだケーキや七面鳥の丸焼きやシャンパン等が所狭しと並べ、俺は窓を全開に開放し、暗い夜空から、はらはらと舞い降りて来る雪をぼんやりと眺めていた。

部屋の明かりを消して、その代わりにテーブル上に水の入った大きな球状型グラス内で、キャンドルがユラユラと赤い炎を灯していた。

時折、ツリーの電飾が暗い部屋の中を赤、青、緑、黄、オレンジ色を代わる代わる照らす。

忍はテーブル脇のソファに腰掛けていて、部屋の中は凄く静かな空間だった。

窓際に座り込んでいる俺の目の前に、音も無く雪が落ちて来る。

何もかもを吸い取ってしまう様な静寂だった。

俺は瞼を閉じる。

そして 再び目を開けると、忍が居る。

そう、俺は『俺』になっていた。

「……でもさ、俺は、男二人で居るよか、女の子と居る方が良いと思うがけど……。折角のイブだって言うのに、何が悲しくて男と居なきゃなんねーのって、思わないんか？」

頭痛気にも、呆れた様に俺は言う。

「別に。くだらない女と居るよりも、海と居る方が俺にとっては大切だ」

忍が平然として答えた。

「はあああ？ おいおい、忍。それって、聞き様によっては危ない発言だぞ？」

俺は思いつき怪訝な顔付きで見ると、忍は微笑みをたたえつつ至極冷静に言った。

「大切で何が悪い？ 第一、独りきりで誕生日を迎える方が空しいだろうが。それに……俺は、お前の傍に居たくてここに居るんだよ」

クスツと笑いを零す忍に、俺は何故か赤面してしまう。

あまり誕生日などというものを、祝って貰った事が少ないせいもあつた。クリスマスのおマケの様に祝って貰った憶えはある。父親は国内外問わず飛び回っていたし、母親は死んだと聞かされていた。叔父夫婦は茶道の家元と言う家業柄、そう言う行事を公に出来る訳も無く、仕事が入って無ければこっそり祝ってくれたのを薄っすら憶えている位だつた。

だから、忍の言葉についつい照れてしまう。

嬉しい反面、くすぐつたい様な、恥ずかしい気持ちもある。この歳になつて、そう言われるなんて思いもよらなかつた。

でも、それ以上に俺は、忍がそう言う考えの持ち主だとは……ハツキリ言つて驚いた。

優しいんだか、冷たいんだか、はつきりしない不思議な奴。

「何だよ。俺と一緒に嬉しくも無いか？ それとも、他に女とのデートでもあつたのか？」

困惑したままの俺に、忍が訊いてくる。

「あるわきゃねーだろ！ あつたらここで留守番なんかするかよ！」

「ま、それもそうだが……居なかつたら、俺が用意したプレゼントは用無しになるところだつたんだがな」

穏やかな表情で笑う忍に、俺はびっくりして目をパチクリしている……。

「こら、海。プレゼント欲しくないのか？ ちょっとは嬉しそうな顔しろ！」

そう言つと忍はソファから立ち上がつて、俺の傍に来ると。ぺしっ。

忍が俺の額を、右手の人差し指で軽く小突いた。小突かれた額に左手を当て、きよとんとしながらも頷く。

「え！？ あっ……うん……」

静かな部屋にカチツと言う音が響くと、壁掛け時計の小人達がオルゴールの音色と共に踊りだし、十二時を知らせる。

「ハッピーバースデー海」

忍はソファアの後ろに隠しておいたプレゼントを取り出し、と、ほいっと俺の目の前に差し出した。

「ありがと、忍」

「……………」

「なん……だよ？」

意味有り気な表情で見る忍を、俺は見返した。

すると、忍はクスリと笑う。

「そのプレゼントは海に。そして……」

忍はそう言っただけで俺の真横に座り込むと、右手を俺の前に出す。

ひらいた掌から蒼く光る、直径三センチの小さな宝玉が現れた。

「これは元々、お前の物だ。今まで俺が預かっていた。受け取れ海

……………そして、思い出せ……………」

忍の真剣な眼差しに、俺はうるたえつつ蒼い宝玉と忍を交互に見比べる。

「なあ……………これ、何なんだ？俺の物って？思い出せってどう言う事……………」

「受け取れば解るよ。さあ……………」

何時に無く、優しい瞳で告げる。

俺は忍のその言葉に逆らえず、恐々と右手を差し出す。

す……………っと、忍は自分の手を俺の手の上に重ね合わせた。

カッ！！

蒼と白い閃光が、重ね合った指の隙間から溢れ出す。

「……………っ！！！！」

俺の身体の中で何か壊れる様な、溢れる様な、中に入って来る様な、奇妙な感覚が身体中を駆け巡ってゆく。

「んんんっ……………！！」

俺は苦しくて、きつく目を瞑る。

頭の中で閃光と共に、何か崩壊した。

封印

「ん……？」

俺はゆっくりと目を開け、周囲を確認した。天井や周りは暗く深い闇が、辺りを覆っていた。

「ここは……？」

俺は横たわっていた上半身を起こす。

「どこだ？ ここ？」

ゆっくりと立ち上がって、もう一度真っ暗な辺りを見回す。前方にポウ……と、丸く小さな灯が現れる。

俺はその灯に呼ばれている様な気がして、それに向かって歩き出していた。

「え！？」

あと一メートル位に俺が近付くと、灯は波紋となって広がる。漆黒の闇を溶かす様に、明るい光が空間に満ち溢れていく。

「……っ……！」

少しの間だけ目がついていかなかったが、ゆっくりと焦点が合ってくる。

俺の足元には、銀色に光る氷の花が咲き乱れていた。花は暗闇を照らす様に、輝いていた。

その氷の花が避ける様に、真ん中に道が存在していた。

そして、その道の終着点には　　なんと、氷漬けの人間がいたのである。

正確には、正方晶系の水晶とも、氷ともつかない結晶の中に一人の女性が閉じ込められていた。

結晶の中には水の様な液体が満たされており、時折、コポツ……コポツ……と、気泡が弾けていた。

まるでその人は生きているのだと主張する様に……。

彼女はとても美しい女性だった。

ギリシャ神話に出てくる様な、純白の衣を纏い、肩位の綺麗な銀色の髪がゆらゆらとその液体の中で摩く。

瞳はきつく閉じられていたが、俺には彼女が何故か泣いている様に見える。

意を決して俺は、恐る恐る足を前に踏み出して行く。

パシッッ。

パシッッ。

足元の氷の花が砕け散る。

俺はそつと結晶に手を伸ばして触れた。

ひんやりとした冷たさが、手に伝わる。

「……何だよ、コレ」

「白竜だよ。海」

呆然と見詰めている俺に、何時の間にか背後に立っていた少女が答えた。少女の腰までの長く蒼い髪が揺れた。

「シアーナ？」

俺の言葉に彼女はフツ……と、切なく微笑んで言う。

「そう、シアーナよ。海」

「え……？ あれ、でも、シアーナは俺じゃ……」

「ええ、そうよ。『オリジナル』のシアーナは貴方よ。私はシアーナの一部……この世に産まれる時に切り離された、遠き記憶の欠片。只の思念体……」

そう言うシアーナは、何だか少し辛そうであった。

俺は黙ってシアーナの言葉に耳を傾けていた。シアーナは俺の隣りに来ると、結晶体に右手で触れ、閉じ込められている彼女を見上げる。

「シアーナ、彼女は一体何なんだ？」

「彼女の名は白竜王……ラティナ。『調和と増幅』を司る、女神ラティナ……彼女の『白竜』の名と『力』を受け継いだ為に、シアーナは狙われ、命を落とす結果となった総ての原因よ。でも、それは

ラティナの本意では無いわ。たまたまそういう結果になっただけ……」

シアーナは視線を足元に落とす。

俺には彼女が、遠い過去を思い出し出している様に見えた。

「海……貴方は、あの惨劇を繰り返し返してはいけないの。そして……『白竜王』を復活させ、悲しい宿星に終止符を打つ為に貴方が存在するのよ、海。本来なら海とシアーナは『力』と『記憶』に分かれて産まれてくる筈だった」

「えっ？ それじゃあ……どうして……」

俺の疑問に、静かにシアーナが答える。

「それは私にも解らないわ。ただ……どちらかが、消滅しかかった為に、融合をしなければならなくなったの。そのせいで、記憶の封印の効力の負荷が、身体に変化をもたらす様になる」

「変化？ 変化って？」

俺はシアーナを問い詰める様に訊くと、彼女は俺を見詰めて、ほんの僅かだけど寂しそうな表情をして言った。

「率直に言っわ。男である貴方が、女に変わるの」

「何でッ！！！」

「理由は簡単。『男』である貴方と『女』であるシアーナが融合した為と封印のせいよ。そう、ある種の両性体と言えるかもしれないわ。と、言っても変化が現れる現象は、ほぼ日常に差し支えない筈よ。変化は満月の夜に、月の光を浴びる事によって起こるから、光りを浴びない限り変化はしない」

シアーナの言葉を聞きながら、俺は思いつきり複雑な心境に陥っていた。

医者には自分は癌だと、言われた様な気分がピッタリだった。

救いが有るような無いような、そんな訳の解らない感情が、頭の中をグルグルと回っている。

「……海。貴方は気付いている筈よ。私が言わなくても……」

その言葉に、俺は感情では理解出来なかったが、混乱している頭

の片隅で理解していた。

「……………」
俺は記憶を取り戻したとはいえ、それが完全な『記憶』でない事を悟る。何故なら、自分が憶えている『記憶』は、明らかにバラバラの鱗片だからである。

簡単に言えば、一種の記憶喪失にかかっているみたいなものだ。

「でも、海には一つだけ思い出せない事が存在する」

「えっ？」

さつきまで弱弱しかった、シアーナの表情が一転する。

儀礼的と言うのだろうか、淡々とした口調で俺に告げる。

「それは　　白竜に関する事……そして、白竜の『力』の使い方はどうやっても、海には思い出す事は出来ない」

「どうして？」

俺の問いに、シアーナは更に続けて言った。

「それは『私』が存在するから　　私は前世の記憶の封印を解く『鍵』であると同時に、白竜を封じる最後の砦。白竜の力は解放してはならないもの。けれど、封じていても僅かながら周りに影響を与え続ける力を秘めている。それは『善悪』に関わらずに……。白竜の司る力は、調和と増幅。周りに在る者、総てに力を与える『諸刃の剣』なの。そして、その力と記憶を解放する時は、ある条件が満たされた時のみ。私はその日まで、この精神世界の一部を閉ざし、眠りにつく……さあ、帰りなさい。貴方を待つ、最愛の人の元へ」

シアーナはそう言い、俺の腕に触れる。

蒼い光の屑が、地面から光の柱の様に俺を包み込む。

「あッ!!」

次の瞬間には、目の前がブラックアウトしていた。

だが、俺は見た　　シアーナが涙を流すのを。

言葉は交わさなかったが、気持ちは同じだった。

そして……。

誰よりも自分が、愛している人の顔が過ぎって消えた。

恋しいキモチ

バラバラになっていたパズルが組み合わさる様に、自分が『誰』だったか、どうして目の前にいる忍が『思い出せ』と言った理由が理解出来た。

ポオオオオ……。

俺の身体全体がいくのが解る。

蒼い柔らかな光に全身が包まれて、身体力が抜けていく様な感じがする。

俺は目をゆっくりと開け、自分に何が起こったのかを確認する。

「……シアーナ……」

俺の瞳に映るのは、心配そうな忍の顔だった。

そして、床に着く程の蒼く長い髪。

自分の身体は、どこから見ても『女』の身体に変化していた。

ちちゃんと胸もあるし、腕も、腰も、何もかもが華奢で『海』とは違っていた。

「ラリス……」

俺の口からその名前が自然と出てくる。

けれど、その言葉は俺であって『俺』ではなかった。

忍は優しく愛しそうに微笑んで、軽く俺に口付けた。

「シアーナ、愛している」

「ラス……」

俺は忍の言葉に、苦しさを憶えていた。

忍がびっくりした顔で、俺の頬に手を伸ばす。

「泣くなよ。俺はここにいるだろ？」

そう言つと、忍は俺を自分の腕の中へ、引き寄せて抱き締めた。

知らず知らずの内に、俺は両目から涙を流していた。

「………ラス、ごめんなさい………私は、貴方との約束を守れませ

ん

沈んだ声で、俺は忍の腕の中でそう言った。

「シア？ 何を言ってるんだ？」

「だって……この姿は一時的なもの……封印が開封されたから……そして、満月の夜にのみ、この姿になれるだけ……それでは到底、貴方の妻になれないわ」

「ばっ、馬鹿言っなッ……！」

バツ！ と、俺を引き剥がして真剣に言う。

「ラス？」

「そんな事言っなよ。俺がどれほどお前を捜したか……『お前』に逢いたかったか……この日を、記憶が戻るのを待っていたか……」

俺の頬を忍は両手で包む。

「でも、私は……貴方との約束を破った事にかわりはないのよ？」

「いいんだよ。俺がここにいて、お前が俺の目の前に居る。それだけでいいんだよ、シアーナ」

忍は俺の頬に伝う涙を拭き取って、微笑んだ。

「ラス……」

「愛しているよ」

忍の唇と、俺の唇が重なり合う。

優しく、あたたかな長いキスを、俺は目を閉じてあっさりと受け入れていた。

その行為を待っていたかの様に……。

「んっ……」

だが、忍の唇が離れた途端、自分が何をしたのかを初めて気付く。

「なっ……なななんだあッ……？」

俺は奇声を上げて仰け反る。

忍は「ありゃ？」という表情をしてから、くすりと笑いを零す。

「ま、仕方ないか。記憶を取り戻したばかりだからな。おい、海。自分が誰だか解るか？」

忍はペチペチと、俺の頬を叩いて問い掛けてくる。

俺はしどろもどろに頷きつつ応じる。

「あ、うん、解るよ……解るけど……いつ、今のは……」

「今のってキスの事か？ それがどうかしたか？」

「そうじゃなくて！」

噛み付く俺に、忍はふうと小さく息を吐くと。

「そうじゃないなら、何だよ？」

逆に忍は俺を問い詰めようとする。

俺は顔から火が出るんじゃないかと思う位、焦りながら言っていた。

「ええつと……そうじゃなくて……あの……そのう………今は、俺であつて、俺じゃなくて……だから。あの、その………」

そんな俺を見て、忍が笑いを零す。

こつん。

俺のおでこを人差し指で小突く。

「ばか。何焦つてんだよ、海」

「~~~~~」

俺はさっきまで焦っていたが、クスクスと楽しそうに笑う忍を見ていて、今度は照れずにはいられなくなった。

「さっきのは不意打ちだったかもしれないが、待てなかったんだ。

好きだから……。それに、やっと思い出してくれたしな。俺は、お前が十六の誕生日を迎えるまで待つていた。二人で祝う事が出来なかった歳まで……。だからと言って『女』のシアーナだけに惚れている訳じゃないからな！ 俺はお前が『男』に転生したからと言っても、俺の気持ちには変わりはない。その姿が、満月の夜にしか保てなくても、関係無い。俺は、お前に誓った 永遠に愛する」と

真つ直ぐに俺を見詰める瞳には、打算も嘘も何も無い事を物語っている。

あるのは真実だけ。

俺は何時の間にか、その瞳に釘付けになっていた。

逃げられない……。

頭の片隅で、俺はそれを理解していた。

「シアーナ」

忍は俺の頬に、やんわりと優しく触れる。

ドクン！

ドクン！！

身体中の血が、逆流する様に騒いでいる。

「俺は今も変わらず、君を愛しているよ」

忍の優しい瞳に、吸い込まれてしまいそうになる。

彼の顔が近付いてくるのが解ったが、俺はその行為を抗う事が出来なかった。

「ん」

俺の唇が、そっと塞がれた。

嫌な気は全然しなかった。ただ、どうすれば良いのか解らないだけ……。

そして、やたらに苦しかった。

忍は俺を口付けから解放すると、悲しい位に真剣に言葉を紡いでいく。

「俺には、お前だけなんだ……海。姿が違っていても、シアーナであると同時に、海だという事も解っている。だから、お前を愛している」

何かを言わなければならないと、頭の端では解っているのに。

「……好きだけど……何だか、俺が俺じゃない様で……でも、この気持ちは嘘じゃないのに……な……」

今の俺には戸惑いながら、思い付いた事を言葉にするしかなかった。

俺はふと気が付くと『俺』から離れていた。

忍と『俺』の……二人の横に立っていた。

「ああ、そうだったんだ。だから、俺には解らない事があったんだ。

シアーナが眠りについていたら……」

『そうよ』

凜とした声がする。

聞き覚えのある声……そう、シアーナの声だ。

「シアーナ!？」

俺の声が辺りに響く。

すると、一瞬の内に真っ暗な闇へと周囲が変化した。

ポオツツツ。

淡い輝きと共に、シアーナが俺の前に現れる。

「シアーナ!」

「お久しぶり……と言っても、海にとっては一瞬の出来事だったわね」

小さく微笑みながら、シアーナは続けて言う。

「……やっと、総ての条件が満たされたわ。私の『鍵』の役目は、もう終わり。海、貴方に総てを託します。どうか……ラティナを救って下さい」

シアーナは笑顔で笑う。

パアアアツツ!!

シアーナの身体が、沢山の銀色の光の粒子となって、俺の身体を囲み融け込んでくる。

そして……。

何をするべきか、どうすれば白竜を復活させられるのか、俺は総ての記憶を思い出していった……。

総ての悲しみの始まりは、魔の心を持ってしまった『神』が幸せだった二人の『神』を引き裂いた事からであった。

それが切っ掛けとなり、神々の世界に戦争が起こる。

辛うじて魔となった神々を、地界よりも深い暗黒の世界へ封じる事が出来た。

しかし、その戦いによって『天上界』は滅びを迎えた。

『天上界』はその意味を失い、また、聖なる加護を受けていた『地界』は、戦いの衝撃により幾つかの世界に分かたれた。

その後、今の世界が出来たのだった。

その悲しい過去を背負いながら、自分が自分である為に『心』を封印して、己の血と魂の欠片を持つ『血族者』の精神の中に生きる事を選んだ……女神、白竜王ラティナ。

彼女はただ、愛しい人に逢える日を願い、永い眠りについた。

そして、白竜の血族の一人だった、シアーナはそれを受け継いだ。でも、あの時ではラティナの願いを現実のものとは出来なかった。

総ての竜王揃いし時

時の門は開かれる

天から降り注がれる煌く光は

幾星霜の時間を超えて

祈りを現実のものとするであろう

アトランティスに語り伝えられていた伝承は、白竜を蘇らせる術を示していたのである。

そして、俺がなすべき事は一つ。

ゲート

「……海……海」

誰かが呼んでいる。

とても心配そうな声で……。

ずっとずっと前にもこんな風に、誰かが自分を呼んでいた。あれは……いつだっただろう……。

靄のかかった思考の中で、その声を頼りに俺は瞼を開けた。

「海！」

瞳に飛び込む真剣な眼差しに、俺はデジャヴを体験していた。

「……ス。なんて顔してるのよ……？」

俺の口から自然に出た言葉に、驚いた表情をして。

でも、その『名』では無く。

「海？」

彼は俺の名を呼ぶ。

「……俺は……」

自分の名を呼ばれて、俺は気が付いた。

俺が誰であるかを。

そして、俺の身体を優しく、抱き止めている人物が『忍』だという事を……。

「大丈夫か？」

「あ……うん。俺……」

ぼーっとしている俺に、忍が優しく応える。

「白竜の泪を受け入れたかと思ったら、気を失ったんだよ」

「……なあ。俺、どのくらい気を失ってた？」

「四、五分程だ」

「そんなもんか……」

立ち上がるうとする俺を、忍が心配そうに支えてくれる。

「平気か、海？」

「もう、大丈夫。ごめんな、心配掛けちゃって」

俺は忍を心配させたくなって、笑顔を作る。

「あんまり無茶するなよ」

「分かってるって」

俺はそう答えて、天を仰いだ。

満月の月光が降り注いでくる。

「……時は満ちた。これから、アトランティスへ向かう。皆、力を貸してくれるね？」

振り返り、皆に俺は告げた。

「え？ え？ アトランティスって何？ どこにあるの？」

俺の台詞に状況を飲み込めない翔がいた。

理解している他の皆は、そんな翔の様子に苦笑を零していた。

「翔には後でちゃんと教えるから、海は話を続けてていいよ」

ニコリと微笑んで、雷が俺に言う。

「え？ そうなの？ ま、いつか。じゃあ雷、後で教えてくれよな」

「」

雷の言葉に、翔はあっけらかんに言った。

翔の能天気と言うか、いい加減な所にはちよつと呆気にとられる。

まあ、その方がこつちとしては楽だけどね。

「んじゃ……アトランティスに行く方法だけど、なんせ海底に沈んじまってるんで、空間を繋いで道を開く……」

「あ！ お兄様、それってゲートを開くんですね！」

ティアがすかさず、俺に言った。

「そう言う事」

俺はティアにウインクしながら答える。

ゲートとは、空間と空間を繋ぐ扉。

ティアがこの世界『人間界』から『精霊界』へ戻った時に使用した方法と同じである。

ただ、違うのはこの世界の中だけという事だ。

簡単に言うならば、空間転移という代物である。

「でも、お兄様。ゲートを開くには、ある一定の磁場が必要じゃないの？ 転移する双方の場に、無くてはならないでは……？」

あれ？ という様な顔をして、ティアが俺に質問する。

俺はニツと笑いを浮かべ、ティアに告げる。

「それには及ばないよ。何てったって、この家には最適な場所があるだろ？」

そう、この皇家には『神聖』な場所……空間を繋げられる所があるじゃないか。

これを使わない手はないって訳だ。

「おっしゃーッ！ 善は急げ。何でも来いーッ！！」

内容が解っていないのに、やたらと意気揚々としている翔であった。

その様子をまったくもう、と言う顔をしている雷と忍が見ている。

楽しそうなティアのクスクス笑いにつられて、俺も笑い出す。

龍斗も少しだけ、微笑んでいた。

復活の時

冷たい水の底に眠る大陸。

アトランティス。

南極大陸の遙か下に……。

遙かな昔、海底に沈んだ。

そして、永い永い年月を氷壁によって、誰の目にも触れずに……

その姿をそのままに。

懐かしい国……。

俺にとっても。

忍にとっても……忘れられない場所。

苦しい事も、楽しい事も、悲しい事も沢山あったけど……

今思うと、それでも確かにあの時……俺達は幸せだった。

そう感じる事が出来る。

俺達がゲートを潜り出た先は、俺の故郷リユース国の宮殿の中に在る『光の間』と呼ばれていた場所であった。

今で言う、ロマネクス式調の大聖堂の造りに似た、丸天井に描かれた細密画があり、それを一層映えさせる様に、金銀のあらゆる細工が端正に純白の壁に施されていた。

「……わ……あ……っ」

翔が声を上げて、グルリと辺りを見回した。

「へえ。結構、綺麗なんだね」

雷が荘厳さに見惚れつつ、声を出した。

「でも、どうしてかしら？ 多くの時間が経っているというのに、壊れていないなんて、不思議じゃない？」

ティアが珍し気に、暖炉に様に突き出た祭壇をしげしげと眺めつつ言った。

確かに、床も壁も何もかもに至るまで、まるできちんと掃除された様に綺麗である。

でも、それにはちゃんとした理由があったのだ。

「ここは、殆ど真空状態で保存されていたんだよ。だから、金属とかは酸化していないし、建築物や石で出来た物は風化していないって訳だ。俺達がゲートを開いた瞬間から、アトランティスには空気が満ち、止まっていた時間が動き出した……と、言う事だ。まあ、それは良いとして、目的地へ急ごう」

俺は皆を最終目的地『白の庭』通称、儀式の広間へと促す。

アトランティスの中心に位置する場所こそが、白の庭である。ルネッサンス様式の建物に囲まれたそこは、中庭言う名称がピッタリであった。

庭の周りには木が植えてあり、近くにはグリフォンの像を置いた噴水がある。

美しく配置された庭には、造った者の想いが伝わってくる。

「きつと……青い空から降り注がれる太陽の光は、とっても綺麗だったんだろうね」

雷は優しく微笑むと、顔を天へと向けた。

「あれ？」

雷が不思議そうな声を上げた。

その驚きの訳は、上空を見れば一目瞭然であった。

海底に沈んだ筈なのに、空の色が青であったから。

でも、その色は空の色では無かった。

確かに美しい色はしているけれど、どこか冷たく浅い青緑色をしていた。

「アイス・ブルーか……」

忍が穏やかに呟いた。

忍が称したそのまんまなのだ。

今ある空の色は、氷の色なのであった。

大陸は巨大なシールドによって水や氷に侵食されるのを防いでい

たから、自然と氷が空にへばり付いた様になっていたのである。
そして、その氷の光によって、太陽の光の代理の様に明るく大陸を照らしていたのだった。

「ついたぜ、ここだよ」

庭の中心には、魔法円が描かれていた。

その真ん中に円柱状の柱がある。

俺達はその前にいる。

「忍。『鍵』を貸してくれ」

俺は傍にいる忍に手を出して言う。

「これか？」

忍はズボンのポケットから、ラフェーサことリスに手渡された、十二面体の淡蒼色の結晶体を出すと俺に手渡す。

「じゃあ、儀式を行う。皆、魔法円の中に入って」

「ああ、分かった」

しかし、ティアだけは逆に俺の所へと近付いて来る。

「あの、お兄様。これを精霊王様から預かって来ました。お兄様のお役に立つ筈だと」

ティアの左手の内に、銀色の杖が現れる。

杖の先端に、クリスタルと翼を広げた状態の細工が施されてあった。

「この杖は？」

「生命の杖……白竜王を復活させるのに、必要でしょうか？これが有ると無いのでは、お兄様に掛かる負担が大きく違いますよね」

にこつと、笑顔を作ってティアは言う。

「解っていたのか？」

「お兄様も結構、無茶をなさいますね。はい、お兄様。生命の杖をどうぞお使い下さい」

俺はティアから差し出された、銀の杖を静かに受け取った。

「ありがとう」

「いいえ、お兄様のお役に立てる事が出来て、私は嬉しいです」

そう言つと、ティアは雷達の所へ行く。

その可憐な後姿を見ながら、俺は心の中で「有難う」と呟いていた。

「なあ……」

「え？」

俺の背後で、俺達を見ながら終始無言で立っていた龍斗に話し掛ける。龍斗はビックリしながらも、俺の声に答えようとする。

「何か……？」

「お前は……前世の事を、このアトランティスの事を憶えているか？」

俺は振り返りつつ、龍斗に質問を付き付けた。

龍斗は一瞬だけ、強張った表情を見せる。

それが何を意味するものなのか、俺には察しが付いた。

「……憶えてて、ここに来れるよな？ と、思われても仕方が無い。確かにその通りなんだけど……」

陰りのある表情で、龍斗が言った。

そんな姿を見ながら、俺は言葉を紡いでいく。

「別に……あの時、俺が出来た事なんてちよつとしかなかった。ティアを……バールを助ける事だけだった。ラスとの約束も破る結果となった。ましてや、国を守り、白竜王を蘇らせる事なんて、あの時の俺には出来なかった。そんな奴が、お前を責める資格なんて無いよ。どんな訳があったにせよ、お前が沢山の命を奪ってしまったのは事実だし、結局は俺もラスも『命』を奪う結果をもたらした。だってさ『直接的』も『間接的』もなんて関係無い。だって、そうだろ？ 命を奪うつて事に変わり無いんだから……それを誰が悪いなんて決め付けられるか？ 悪いって決め付ける奴がいても、そいつらに何が出来たって言うんだ？ 力を持った俺達だって、大した事が出来なかったって言うのにッ！」

俺は少し感情的になって言ってしまった。

だって……。

俺には。

俺にはラティナの想いが解るから……。
彼女の苦しみが解るから……。

黒竜王がどれだけ優しい心の持ち主だったかを、俺は知っている。けれど、シアーナだった頃の俺には、黒竜王を止める事も、ラティナを復活させる術を持つていなかった。

だからと言って、屈折した愛を受け入れるなんて出来なかった。

ラスがいたから。

ラスを愛していたから。

でも、自分の国と、ラスのいる国……ティアナ国の平安と、ラスの命を条件に提示されたら、受け入れる事が自分に出来る精一杯の事だと勘違いをした。

守りたいからって、身を投げ出してもその人は喜ぶ筈無いのに……。

その人を苦しめる事にしかならなかったのに。

「でも、俺は沢山の命を手を掛けた。それは、どうやっても償いきれない事実だ」

龍斗は自分の手を悔しそうに見詰め呟いた。

「俺も……お前と大して変わらない。でも、それだからと言って、その『罪』に苦しむ必要なんて無い。大切なのは、今が何故あるかって事だと俺は思う」

俺は笑ってそう言う。

笑っていた方がいい。

苦しんでいたって、何も良い事は無いから。

苦しみは憎しみを生み、やがて絶望を引き起こす。

「俺が……俺達が前世の記憶を持って生まれたのには、きっと『過去を繰り返さない』そう言う理由があったんだとそう思う。今は……俺、あいつと一緒にいられて幸せだと感じてる。辛い過去があるからこそ、幸せになる権利は絶対あると思ってる」

俺はちらっと、遠くにいる忍を見遣って龍斗に告げた。

「幸せになる権利……」

「ああ！ そうだろ？ 人間の一生なんかよりもずっと、ずーっと苦るしんできた二人が幸せになれないなんて、絶対に不公平過ぎる！！ しかも、仕組まれた『不幸』なんか認めるなんて馬鹿げてる」キツパリと言う俺は、なんだか自分にも言い聞かせているみたいだな、と思ってしまう。

世の中が否定するであろう、忍と俺の関係のどこが悪いんだ！ と、言いたくて。

その人の幸せの価値観は、その人じゃなければ解らないのに、親や他人はこうじゃなければ幸せになれる筈無いつて言うけど、その人の心は、未来はその人のものなのだから、自分が決めて何が悪い？ 何が間違っているというのか！？

俺の幸せは、忍との約束……果たせなかった想い、総てだとはつきりと感じていた。

「……ラティナもお前も幸せになっていいんだよ！ やつと巡り逢えるんだぜ？ 誰が何と言おうが関係無い。当事者の気持ちなんて他の奴等には絶対に解らない！！！」

「……ああ、解らないだろう……どれほど苦しんで、気が狂いそうになったかなんて……気が狂っていた時期もあった……」

俺の言葉に、龍斗は切ない表情を浮かべる。

「だから……もう、未来の為に生きていっていいんだ。過去に捕われていては、何も解決しない。俺は俺の出来る事をやるだけだし、お前はお前の真実を求めればいい。さあ、白竜王ラティナを復活させよう！ 過去の過ちを変える為に！！」

俺は龍斗に微笑みを向ける。

それは、未来と正面に向き合った意志の表われ。

龍斗は頷いて応えた。

その瞳に映るものは、もう過去の悲しみでは無く、未来を切り開く力を宿した光であった。

「暗闇から彼女を助けて、もう……二度と彼女を失わない為に……」

「ラティナは、ずっとお前だけを待っていた。だから、もう彼女を離すなよ」

俺は龍斗に告げる。

その言葉はラティナの確かな気持ちであり、俺の気持ちと同じで
だった。

「離さないさ」

龍斗の真剣な言葉に、俺はほっとした。

「じゃあ、魔法円の中に……」

俺は龍斗を促す。

「ああ」

龍斗はしっかりとした足取りで、魔法円に足を踏み入れる。

「……………」

俺は小さく息を吐いて、柱の前に立った。

突き出た柱には、色々な魔法文字が彫り込まれてあった。

視界に飛び込む様に、中央に六角型の穴がある。

俺はそこに『鍵』を詰め込む。

ズズズズズズ……。

柱が音を発てて、地に沈んでいく。

ポオツ。

魔法円から白い光の柱が立つ。

すると、一瞬の出来事が起こる。皆の姿が掻き消えたのである。

魔法円を軸にして五方向へ伸び、半径五メートル程の五芒星の魔

方陣が出現する。

魔法円を取り囲む様に、魔方陣が組まれたのだ。

五芒星の先端一つ一つに、直径二メートル位の大きさの淡く輝く

光の柱が上がった。

柱の中に一人ずつ誰かがいた。

柱はそれぞれ、光の色が違っていた。

北に黄金の輝きと翔。

東に銀色の輝きと雷。

西に青色の輝きとティア。

南東に緋色の輝きと忍。

南西に漆黒の輝きと龍斗がいた。

皆……忍、俺に力を貸してくれ……。

俺は瞼を閉じ、印を組む。

「時至れり……今こそ光を開放す……」

白い光の柱が一気に広がり、俺の身体に力が満ちていく。

心臓辺りから、背中にへと力が溢れていくのが解る。メキメキと背中が軋む様な不思議な感覚がすると、純白の羽が俺の背に生えたのだった。

翼は白竜の力の、迸りの一端。

バサツ……。

純白の翼を広げ、ゆっくりと飛び立つ。

光の柱の中で、俺は生命の杖を掲げた。

「総てなる命を司る力よ！！」

辺りに放たれていた杖の輝く光は、一条の光の矢となって天へと昇る。

「今一度、再生する力を我に！！！！」
すると……。

ふわふわと雪の様に降ってくる、柔らかな白く光るものがあつた。それはまるで、恐竜の卵の様に大きかった。

腕の中にすっぽり入る程の大きさで、俺はそれを優しく抱き締め
た。

「……もう、いいんだよ……」

俺は自然と、そう呟いていた。

瞼を閉じたまま、心の中に……魂の中に呼び掛けた。

出ておいで……。出ておいで。ラティナ、ダークが待って
いるよ……。

カアアアツ……と、身体が火照る様に熱くなる。

胸の中から熱いモノが、抜けていくのが解る。それが、卵の中に

吸い込まれていった。

俺は瞼を開けて、腕の中の卵を見詰める。

ポオオオオツツツ。

卵が白銀色に輝き出した。

輝きと共に……。

卵が、次第に大きくなっていく……。

「ラティナ……」

卵はいつしか、人の形を成していく。

人間の女性の姿を……。

俺の腕から離れて、それは地上へと降りて行く。

雪の様に、ふわり、ふわり……と。

視線を外側に移すと、五つの光柱は無くなっていた。

眼下では、忍達が顔を上げて待っていた。

俺もラティナに続く様に、地上へ降りて行く。

ラティナの横で。

「……う……ん……っ」

白銀色に輝く光を全身に纏いながら、ラティナが小さく声を発し

た。

「……ラ……ラティナ？」

俺の声に少し反応して、彼女はゆっくりと目を開ける。

綺麗なブルーアイズが、ぼんやりとこちらを見た。

「……わ……たし……は？」

ラティナが声を上げた、瞬間。

ふわん……と、地上に着く。

パアッ……!

と、俺の背中に有った翼が、銀色の粒子となって消えた。

「ラティナツツ……!」

切羽詰った様な声を出して、龍斗が駆け寄って来てラティナを抱

き締めた。

ラティナは何が起こったのか、少しの間だけ理解出来ないでいた

様だったが、暫くして言葉を紡いだ。

「……ダー……ク？」

「ラティナ！ そうだ、俺だよ」

「ダーク……っ」

龍斗の声に少し幼げな顔を崩し、ボロボロとラティナは泣き始めた。

「ダーク！ ダークッ！！！！」

何だか俺もちよっぴり、泣けてきそうになった。

でも、抱き合う二人を見詰めて、俺は心から良かったと思う。
どうか……。

幸せに………。

終わりと始まり

皆をゲートから帰した後、俺と忍は忘れられない場所へに、二人だけで来ていた。

ウエントウスの丘へと。

白い花が咲いたままで時を止めた、草原に座り込んで懐かしい風景を見ながら言う。

「なあ、忍」

「ん？」

「また、俺達……本当にここに來れたんだよな……」

「ああ。結婚はしていないけどな」

隣りにいる忍が、くすくす笑って言った。

「なあ、もしも……もしも、俺が女になれる方法が有るって言ったらどうする？」

ふいに真面目になって、俺は忍に問い掛けた。

忍は至極冷静に答えた。

「お前は……女になって『光月海』を捨てるのか？ やめとけ、どうせ後悔するだけだ。お前は光月海のままでもいいんだよ。今更、女になっただって、素直じゃない可愛気の無い女になるだけだぞ？ 海の方が余程可愛気があるぞ」

「なんだよ、それーえ」

ぶつたれながら俺が言うと、忍は楽しそうに微笑んで俺の肩を抱き、自分の胸へと引き寄せる。

「大丈夫だよ。お前がもう、月の光で『シア』にならなくても、俺はそれ以上に『海』である、お前を愛してるから……」

がばっ！ と、引き寄せられた顔を上げて、俺は忍を凝視していた。

「し……知っていたのか？」

「お前の考える事だ。大体の想像はつく」

忍はさらりと、言っただけのける。
そうなのだ。

今夜が、最後なのだ。
女の姿で過ごすのは……。

シアーナの姿で、いられるのはこれで最後……。
白竜王ラティナを蘇らせた事で、封印の効力は身体に作用しなくなる。

そう、思うと何だか寂しい様な気もする。本当はそれだけじゃない……忍の相手としても不利になるんじゃないかって思ってしまった。

でも、そんな事など、お構いなしの忍であった。

本当は　　俺の事をどんな姿でも、好きだって、愛してるって言っただけだったから……。

何だか嬉しくなつて、俺はクスクス笑ってしまう。

「なんで笑う？」

「べつにー」

それでも、俺はクスクス笑っていた。

「……………」

すると、忍はちょっと不機嫌そうな表情になつて。

「えっ!？」

ドサツ……………」

忍はよつて、草原に押し倒されてしまう。

「襲っぞ」

真剣な眼差しで、忍が怖い台詞を吐く。

俺は一瞬だけ戸惑ったが、ニッコリと微笑んで忍に告げる。

「いいよ。今なら、シアとして、最初で最後に抱かれてあげるよ」

「……バカ。抱けるなら、とっくの昔に抱いてるよ」

小さく溜め息を吐き、忍が俺に向かって言った。

俺は目を丸くして、忍を見た。

あまりにも忍らしからぬ台詞だったからだ。

いつもの強引さはどうした！？ 俺には強姦紛いな事したくせにッ！！

「な……なんじゃそりゃ！ お前ッ、俺の事バカにしてんのか！？ 怒りをあらわにして、怒る俺を忍は「判ってないなあ」という様な表情で見詰めていた。」

「あんな、海。俺にとつてのシアは、神聖な者の様な存在なんだぞ」
「へ？」

俺は間抜けな声を出して、忍をまじまじと見る。

忍の表情は至って真面目で、いつもの何か企んでるっていうのはかけ離れていた。

「初めて会った時は、天使かと思ったくらいだ」

げっ……。さっきの俺つてば、翼生えてて殆ど、まるっきり天使みたいだったじゃないか！ つて事は、天使の様に思っている人を汚すのは気が引けるって言いたいんだね？ 忍は。

「だから……抱きたくない」

「いいの？ もう、こんな機会絶対無いぜ？」

押し倒された状態のまま、俺は訊く。

しかし、押し倒されてる人間が、そんな問い掛けつても変な気がしたが、敢えて突っ込むのは止そう。

「それに……さっきの姿を目に焼き付けたからいい」

優しく微笑む忍に、俺はちよつとだけ納得のいかないものを感じながら口を開く。

「……ほんとに？」

「ああ。大切な俺の『天使』は、綺麗なまままでいて欲しいからな」

忍はそう言うと、俺に素早くキスをする。

「……以外と、ロマンチストなんだな。忍って……」

俺の言葉に、忍は笑みを零して囁いた。

「好きな奴以外に、こういう事はしないよ」

忍の優しい瞳が近付いて来る。

俺は少し照れながら微笑んで、ゆっくりと瞳を閉じた。

重なる口唇は、切ないくらいに優しく。

あたたかだった。

「俺……忍が好きだよ。誰よりも」

愛してる。そう、言葉を繋げたかった。

でも、言葉が出なかった。折角、言おうと試みたのに、忍の唇が総て奪っていったから……。

でも……まっ、いつか。

いつでも言える機会はあるんだし。

寝ている時にでも、こっそり言ってやるーっと

俺達の本当の未来は、始まったばかり。

先は長いけど、二人なら……。

きつと、乗り越えていける。

幸せになろう！

もう、離れる事はないのだから……。

END E

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5564s/>

MixJuice

2011年4月27日22時40分発行